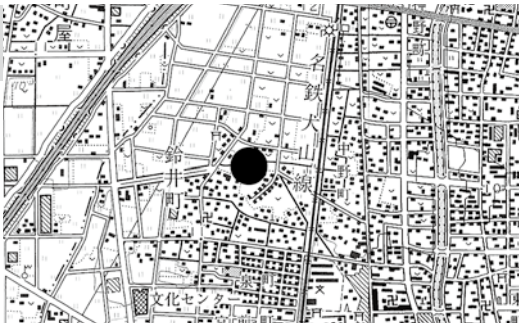
II. 遺跡調査の概要

御山寺（ごさんじ）遺跡

所　在　地　岩倉市鈴井町
（北緯35度17分18秒 東経136度52分04秒）
調 査 理 由　緊急地方道路整備事業3･3･8号一宮春日井線
調 査 期 間　平成19年４月～平成20年２月
調 査 面 積　4,150㎡
担　当　者　石黒立人・川添和暁



調査地点（1/2.5万「一宮・小牧」）

調査の経過　本遺跡の発掘調査は、緊急地方道路整備事業3・3・8一宮春日井線に関わる工事の事前調査として、愛知県建設部都市整備課から愛知県教育委員会を通じた委託事業である。今年度は４年目となる調査で、名鉄犬山線東側区域の調査である。道路などから、調査対象域をA～Fの６調査区に分け、農業用水の関係からF区のみFa区・Fb区に分けて調査を行った。

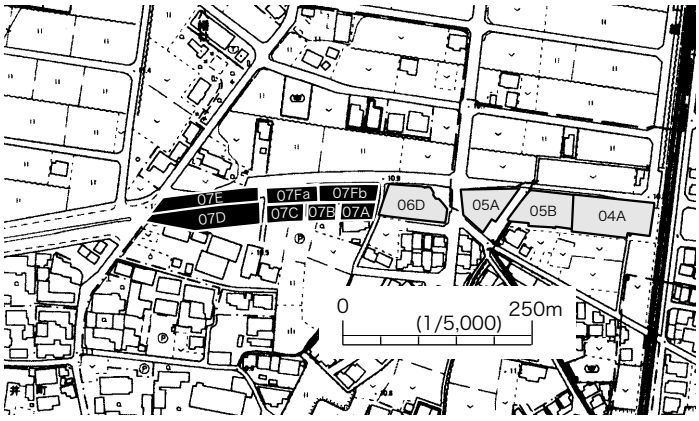
立地と環境　遺跡は、岩倉市中野町および鈴井町にまたがる、東西約500mの範囲に広がっている。当地は、現五条川右岸の犬山扇状地から沖積平野に移行する地点に立地しており、現地標高が約11mを測る。当遺跡周辺には、ノンベ遺跡・西北出遺跡・大地遺跡・町屋遺跡など、縄文時代あるいは弥生時代の遺構・遺物を出土する遺跡が点々と確認されている。

調査の概要　遺跡の様相は、旧河道の西側に当たるD区･E区の様相と、幅広の旧河道が展開するA区･B区･C区･F区の様相と、大きく二種類に分けられる。

1. D区･E区

縄文時代・弥生時代　幅広の旧河道の西側に当たるこの調査区では、調査区東端で旧河道の肩が検出されており、流水時期は別としてもこの地形の傾斜は、各時代を通じて同様に存在していたようである。

調査区全体に、黒色土の堆積が確認された。この堆積のなかで、地形が高くなる、D区北端からE区にかけて地形の凹凸に沿って、縄文時代晩期前半期を中心とする土器片・石器が出土した。黒色土の堆積は最大で厚さ20cmほどを測り、遺物の出土は黒色土上面が多く黒色土中からも出土した。黒色土は部分的に炭化物を包含しており、当時の活動の場としての状況の解明は、今後の課題である。また、弥生前期の深鉢片を出土する土坑や、有茎鏃も出土しているが、より散発的である。



07年度調査区位置図

古墳時代前期～中期　黄褐色砂質シルトを挟んで、古墳時代前期を中心とする集落跡が検出された。調査区中央部付近には竪穴建物跡が重複しており、調査区東側の旧河道西側では、旧河道に併行して溝が複数条検出された。E区では、調査区西端でも溝が検出されており、幅30mほどしかないこの細長い空間が竪穴建物跡の存在する区域かもしれない。竪穴建物跡展開域の東端は、溝の展開域の西端と重複しており、この区域付近では、多量の焼土・炭化物を含んだ、土器集積跡が複数地点で確認されている。竪穴建物跡は、合計20軒ほどが検出された。平面プランは幅５ｍ前後の方形を呈するもので占められており、掘り方内に周溝がないものがほとんどである。保存状況が良好なところでは、掘り方のみならず、貼床・機能面を示す炭化物層・埋土の様子が観察された。また、若干数ではあるが、西三河地域でしばしば認められる、掘り方の底部において幅広の周溝を巡る例も確認されている。溝は５条ほど検出されている。検出時で幅0.5～１.5m、最大で深さ約１ｍを測る。溝の両脇は、掘削時などの土を盛り上げて、堤状にしているようである。すべてが同時期に機能していた訳ではなく、埋められた上に上述したような土器集積が埋土上面に形成されたり、埋まった埋土を再掘削するなどの痕跡が確認されている。これらの遺構群は、松河戸式期以降に形成された褐色中粒砂層によって部分的に覆われていることが確認されている。

出土遺物としては、古墳時代の土師器を主体として、竪穴建物内から鏃と考えられる鉄器と、東端の旧河道内から石製管玉が出土した。

古代　D区において、古代の時期と考えられる竪穴建物跡が１軒のみ検出されている。一辺５mほどで平面プラン方形状を呈するもので、床と想定される機能面も検出されており、全体の掘り方としては深さ約20cmを測る。遺構埋土および遺構検出層は、やや黒色の強いシルト質砂層であった。また、古代に属すると考えられるピット群が検出されており、掘立柱建物が存在していた可能性が考えられる。

古代末～中世前半　この時期の遺構としては、旧河道への落ち際などに展開する礫群および土坑群がある。

D区では、礫群が旧河道の西岸側から東側斜面に向って、投棄あるいは崩れたような形で検出された。礫群は、不定形ながらまとまりを保って存在しているようであるが、重層的な重複関係は著しくなかった。礫は遺跡の基底を成す、濃飛流紋岩が圧倒的多数を占め、中には被熱を受けたと考えられるものも含まれている。周囲からは、折戸53窯式に比定される灰釉陶器から山茶碗第７型式までが多量に出土し、遺物の中にも黒色の炭化物痕が認められるものがある。D区では、旧河道の西岸際まで近世以降の水田掘削が及んでおり、礫群以外の遺構群は確認できなかった。

一方、E区も同様な、濃飛流紋岩を主体とする礫群が検出された。ここでも、旧河道の西岸側からの投棄あるいは崩れたような様相を呈しているものもあるが、検出レベルおよび礫の方向に規則性が認められるものもあり、一部は元位置を保っているものと考えられる。また、斜面部において、重層的な重複関係が認められ、この礫群の形成が垂直方向にも行なわれたことが窺えられる。この礫群を構成する礫の中には、被熱を受けた痕跡が認められるものが多数存在する。礫群の中からは、折戸53窯式に比定される灰釉陶器から山茶碗第７型式までが多量に出土し、青磁碗も出土した。さらに、礫群の下および周囲から土坑群が検出された。土坑群は５ｍ四方の範囲に10基ほどが密集するという、切り合い関係をもって連続・重複している。土坑は１ｍ四方のものから２ｍ四方のものまで、大きさは様々で、隅丸方形状を呈するものもあれば楕円形状を呈するものもある。土坑内からは遺物の出土は少ないものの、一土坑埋土中からは山茶碗が正位で出土している（111SK）。ま

た、調査区北壁付近では、動物の歯（恐らくウマか）と多量のモモ種子を包含する土坑群が検出された（112SK・115SK・264SK）。これらの土坑は同位置に重複して形成されている点が注目される。

この旧河道は、大局的にはD区・E区の東端から東側に向って展開しているといえるが、D区・E区で確認できたものはそのうちの支流というべきものである。特にE区では、土坑下の流路下層では古代の須恵器を出土しているが、灰釉陶器などの出土は皆無である点などから、土坑・礫群の形成が形成された時は、常時の流水がなくある程度の土壌が堆積した段階であったと推測される。

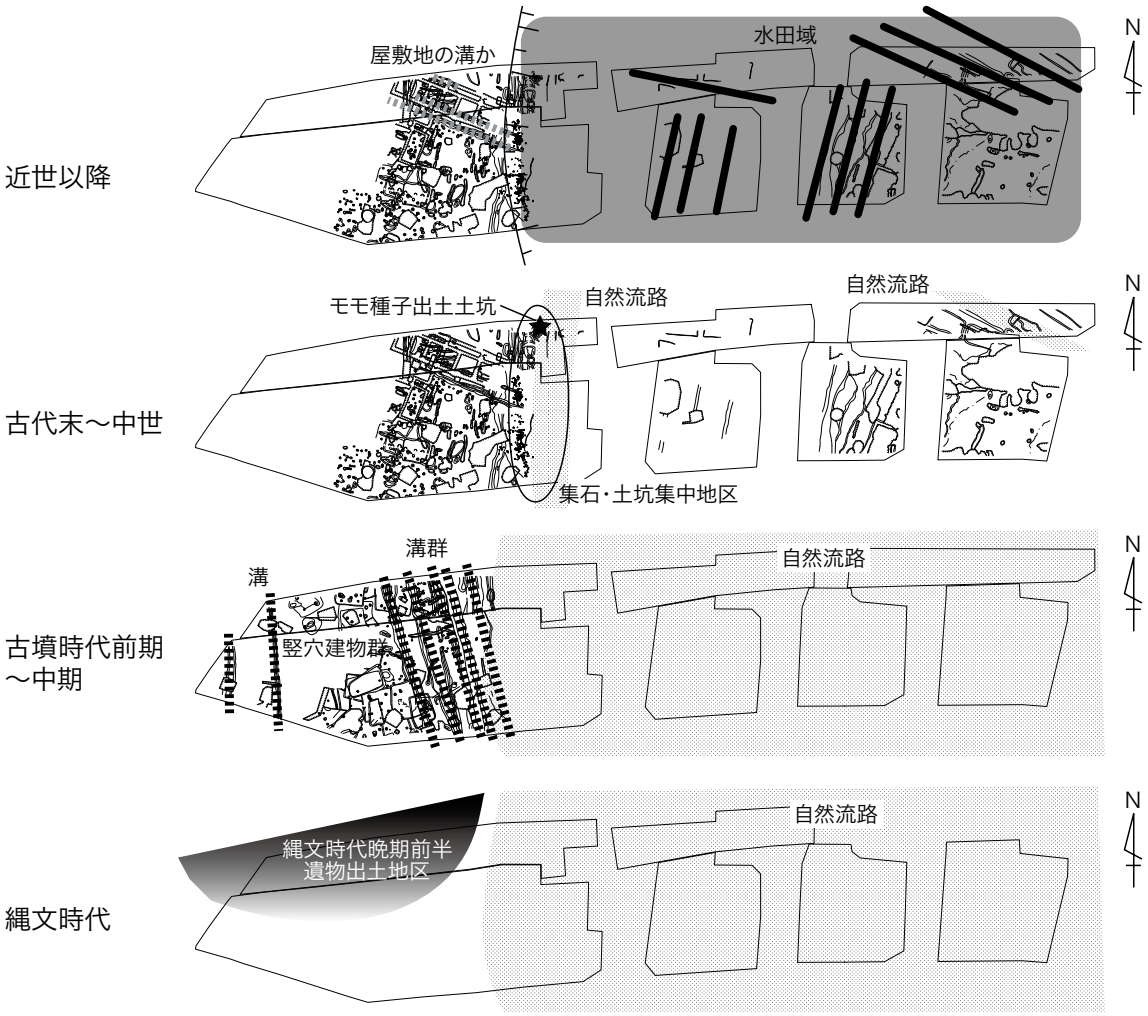
戦国期～近世以降　屋敷地に伴う溝群と、不定形な土坑が検出された。また、旧河道内では、水田跡が検出されている。溝群は、地籍図にある地割りの方向に合致しているようである。

2. A区・B区・C区・F区

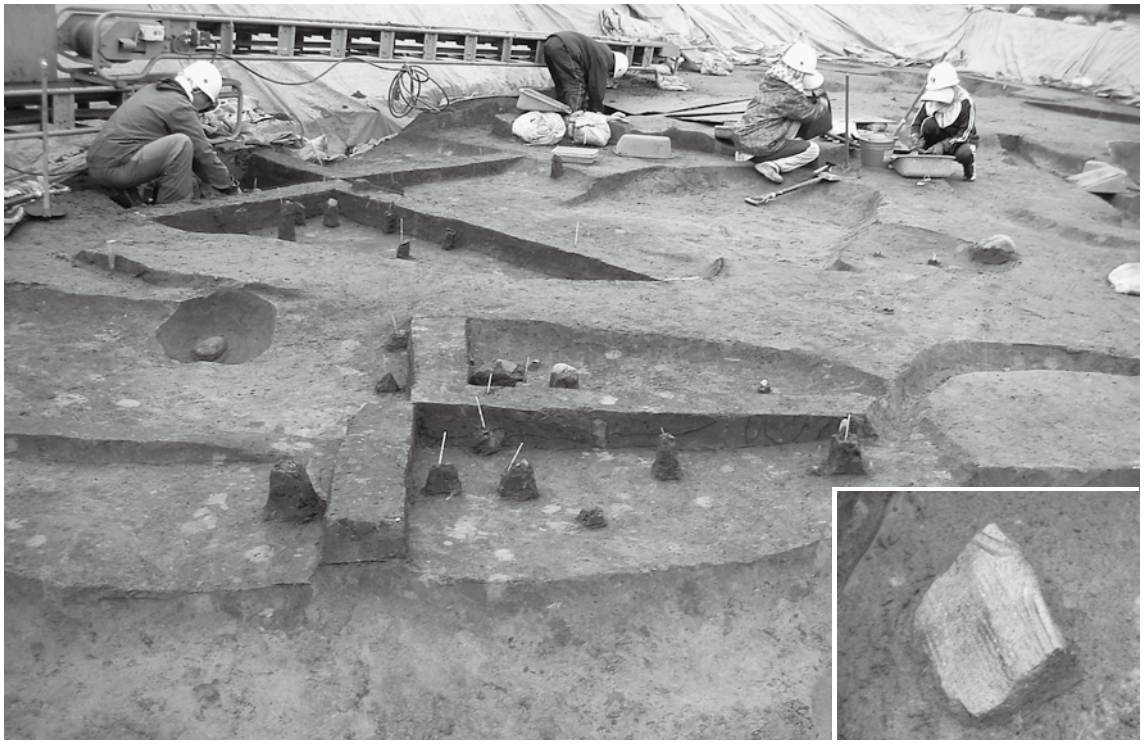
大きくは、旧河道の内部に相当するようであるが、A区とFb区では、中洲状あるいは流路の肩部に当たっていたようであり、A区には若干古代の須恵器を出土する褐色シルトの包含層が検出され、Fb区にも黒褐色を呈するシルト層が古代に形成された可能性が考えられる。旧河道内で検出された遺構は水田跡であり、場所によっては垂直方向に重複して検出されている。時期は、近世期以降と考えられるが、一部は戦国期までさかのぼる可能性があるかもしれない。

総　括　今年度の調査成果をまとめると、次のようになる。

1. 御山寺遺跡では、東西幅500m以上の長い遺跡である。これまで各調査区で個々の帰属時期の遺構が検出されていたが、D区・E区では、層序関係をもって密に保存されている状況が確認できた。
2. 縄文時代晩期前半の遺物群がややまとまって出土した。出土遺物のほとんどが土器である点や黒色土の形成を含めた遺跡形成の状況を勘案した上で、当時の人たちの活動の様相を探る具体例として、今後詳細な分析をしなくてはならない。また、出土土器には、名古屋台地から西側に認められる、いわゆる半截竹管による連続刺突文が認められない点は、多いに注目されよう。
3. 古墳時代前期を中心とする集落跡が見つかった。特に注目されるものは、旧河道に併行してつくられた溝群と付近に形成された土器集積の存在である。また、竪穴建物跡の掘り方には、西三河地域との共通性が窺えられるものも存在しており、遺跡の性格を考える上で重要な事柄かもしれない。
4. 古代末から中世前半期にかけての、礫群および連続した土坑群の検出は、今回の大きな成果である。瀬戸市惣作・鐘場遺跡など、他遺跡においても、被熱した礫や炭化物痕のある山茶碗が流路内に流入した状態で多量に出土する例がしばしば知られている。これまでの調査ではその他の明確な遺構の検出が認められない場合がほとんどであったが、当遺跡の事例では、連続した土坑の認められたほか、一部の礫は元位置を保ったと考えられる状態で検出された。出土遺物には灰釉陶器と山茶碗があるが、中世の施釉陶器である古瀬戸片がほとんど出土していないことが特に注目される。ウマと考えられる動物の歯とともにモモ種子の多量出土も勘案すると、非仏教系の祭祀行為が行なわれた可能性も視野に入れて、今後の整理・分析を行なう必要があろう。　（川添和暁）



御山寺遺跡における遺構の変遷（1/2,500）



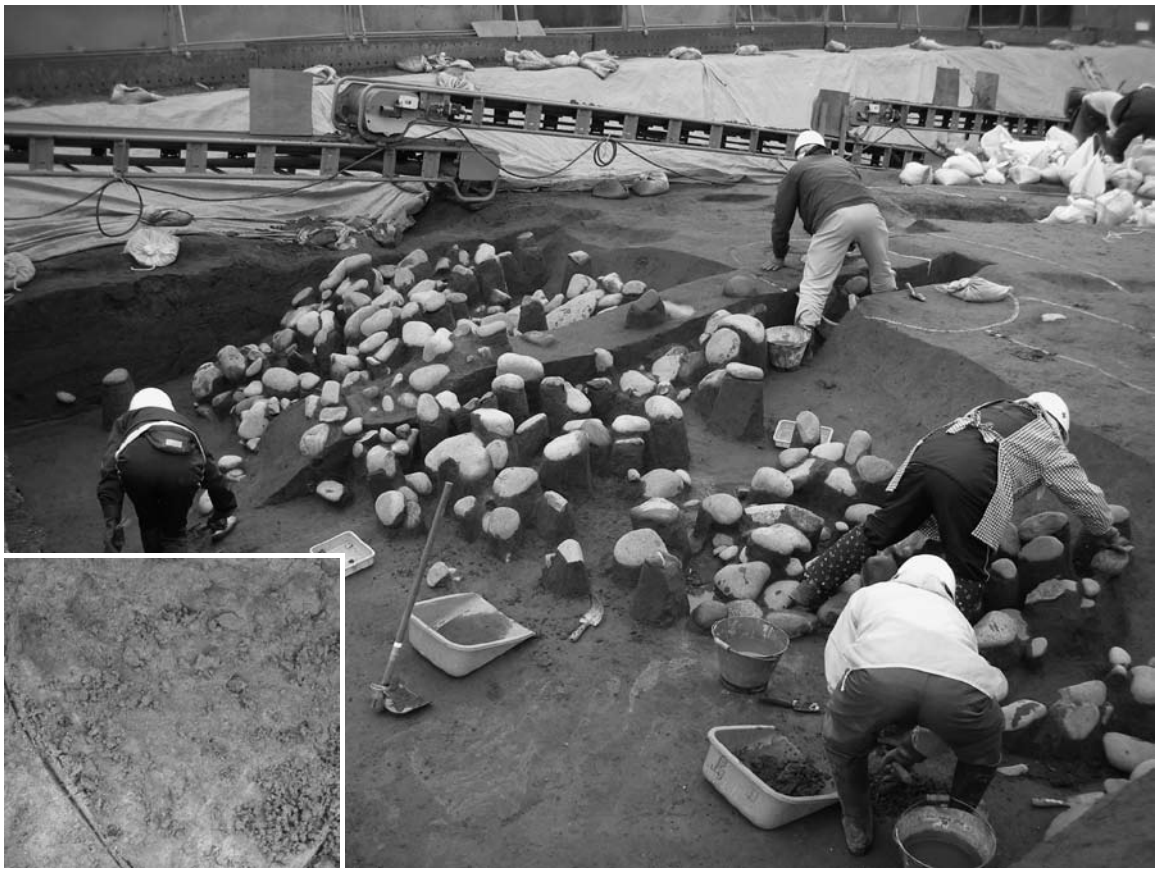
07E区縄文時代遺物出土状況（東より）

出土した縄文土器



07D区古墳時代検出遺構全景（東より）

古墳時代土器集積検出状況

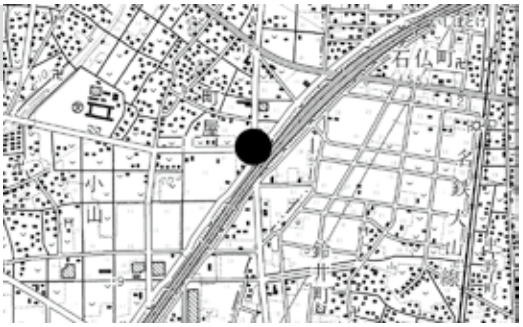


モモ種子出土状況

07E区礫群検出状況（北より）

町屋（まちや）遺跡

所　在　地　一宮市千秋町町屋
(北緯35度17分30秒 東経136度51分44秒)
調 査 理 由　県道名古屋江南線道路拡幅工事
調 査 期 間　平成19年11月～平成20年２月
調 査 面 積　1,600㎡
担　当　者　石黒立人・蔭山誠一・永井邦仁



調査地点（1/2.5万「一宮」）

調査の経過　発掘調査は、県道名古屋江南線拡幅工事の事前調査として、愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じた委託事業である。県道名古屋江南線が名神高速道路と交差する地点を中心に南北約500mの範囲を調査対象地とした。

立地と環境　町屋遺跡は一宮市南東部に位置する。青木川左岸の自然堤防上に立地するが、当該地域は犬山扇状地の末端でもあり現地表下約2mで基盤礫層がみられる。標高は約11mである。

遺跡として知られるようになったのは古く、戦前（昭和16年）には、弥生土器や石鏃・石斧などの石器が採集されて報告されている。その後昭和31年には「花ノ木遺跡」として発掘調査が実施され、弥生時代中期の遺物が多く出土した。遺跡周辺はこれまで水田や畑が部分的に残されていたが店舗や工場などの開発が進んでいる。

調査の概要　遺跡およびその周辺では、水田や畑だったところに最近の土盛り整地が多くみられる。土盛り整地下の状況は、異同はあるものの旧水田（畑）耕作土が確認され、概ねその下で基盤層である黄褐色粘質シルト層がある。この上面を遺構検出面とした。畑の場合は耕作土下に遺物包含層が確認されることがあり、その上層では山茶碗や近世陶磁器を若干含み、下層では弥生土器と石器のみがみられる。07C・07I区では比較的遺物包含層が厚く、上・下層合わせて約60cmの地点もあった。それに対して名神高速道路南側の調査地点では概して遺構の残存状況は悪い。遺物も少ないことから遺跡縁辺の可能性が高いが、基盤層を掘り込む撹乱が多いので注意が必要である。

検出された遺構は、弥生時代中期の竪穴住居跡約20棟と弥生時代後期と考えられる方形周溝墓5基、弥生時代以降の溝10条、古墳時代の河道1条、7世紀後半の土坑3基がある。また弥生時代の土坑や柱穴も多数確認した。出土遺物の主体は弥生土器と同時代の石器であり、ほかに若干の須恵器・山茶碗・近世陶磁器がある。

弥生時代中期の集落　名神高速道路北側の07C・07D・07I区では、竪穴住居跡や土坑などが多数確認され出土遺物も多かった。時期は弥生時代中期前葉から中期後葉である。この北側の07B・07H区では住居遺構や遺物がほとんどなかったが、さらに北の07A・07G区において弥生時代中期後葉の竪穴住居跡や土坑などが検出された。07A・07G区の北端では、基盤層が北へ下る傾斜があり遺構や遺物が希薄になることが確認された。このことから弥生時代中期の居住域は、微高地上全面に展開するのではなく複数の小居住域によって構成されていたものと考えられる。

竪穴住居跡からは中期後葉の土器が出土するが、隣接あるいは重複して検出された土坑からは中期前葉の土器が出土する。土坑のなかには長軸約４mの袋状になるものもあり、その覆土中からは石器剥片が多数出土した。

名神高速道路南側の07J区では、弥生時代中期前葉の竪穴住居1棟と弥生時代中期の土

坑1基を確認した。これにより名神高速道路南側にも弥生時代中期の集落が広がっていた可能性が高くなり、狭小な調査区ながら一定の成果があげられたものとして意義深い。

弥生時代後期の墓域

弥生時代後期には居住域が移動したのか、明確な住居遺構はみられなかった。その一方で07C・07I区にかけて幅約5mの周溝を廻らした方形周溝墓を確認した。方形周溝墓の規模は一辺約20mと大型である。周溝の南西隅ちかくでは赤彩のある土器片やガラス小玉が出土した。周溝の覆土上層では廻間式土器もみられるので、墓に対して継続的な祭祀があった可能性がある。

このほかにも、弥生時代中期の住居遺構が希薄な07B・07H区と07I区北部では、L字に屈曲する溝や、東北東から西南西にはしる幅約2mの溝が約10条確認できた。詳細時期は特定できていないが出土遺物は弥生時代の土器にほぼ限定される。このことから前者は方形周溝墓の周溝、後者は弥生時代にさかのぼる区画溝の可能性が考えられ、微高地上に墓域が展開していたと想像される。

注目される遺物

今回の調査において注目される遺物として、07C区の水田耕作土中より出土した有樋式銅剣形磨製石剣、同区123SK出土の鳥形土器、07H区北端の細粒砂層のラミナ堆積中（自然流路か）から出土した双口土器と片口高杯がある。有樋式銅剣形磨製石剣は基部近くの小片が出土した。粘板岩製で搬入品であろう。双口土器は片口高杯と近似した胎土で、壺の体部上半に波状文が施されている。両者はセットになっていたとみられ、中期中葉の特殊土器と位置づけられる。

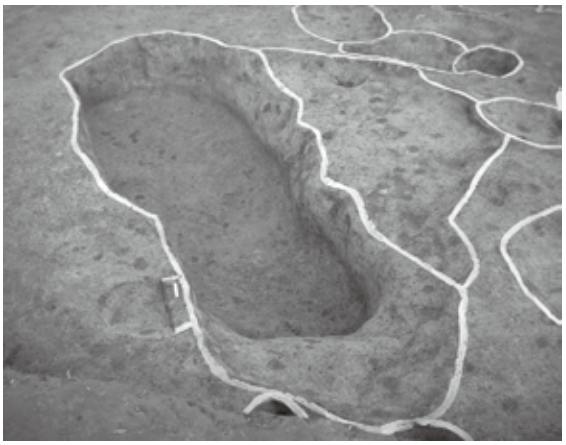
まとめ

町屋遺跡は長らく、弥生時代中期から後期の遺物包蔵地として知られるにとどまっていたが、今回の調査により弥生時代中期の集落および後期の墓域からなる遺跡であることが明らかとなった。当該遺跡の周辺には猫島遺跡や平松遺跡などの弥生時代遺跡が所在しており、それらとの比較検討が今後の課題である。千秋町一帯の弥生時代から古墳時代の動向を探る上で貴重な調査成果が得られたものといえよう。

（蔭山誠一・永井邦仁）



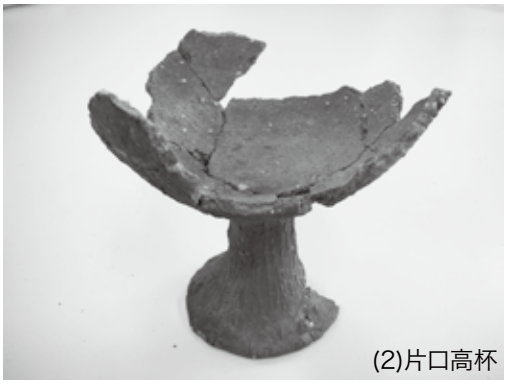
07Cc・Id区全景



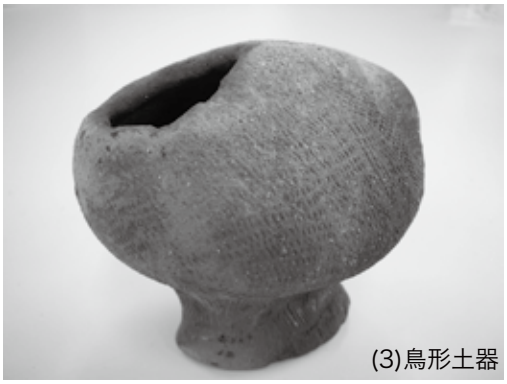
07Cc区051SK



(1)双口土器



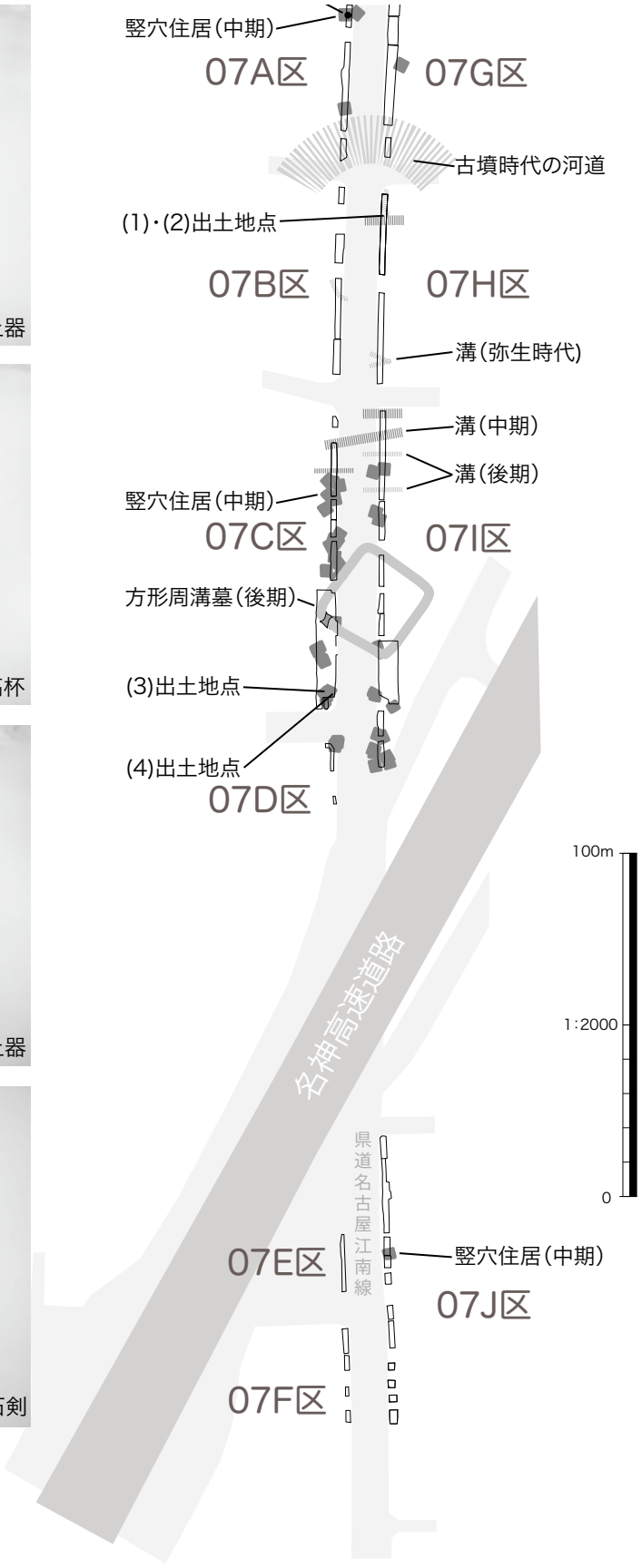
(2)片口高杯



(3)鳥形土器



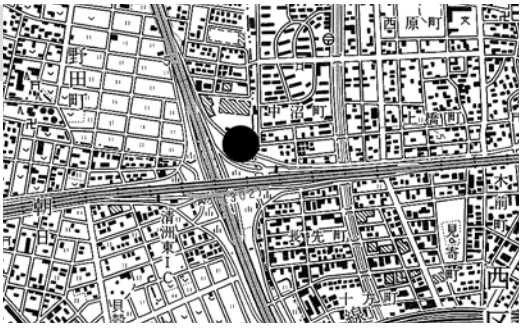
(4)磨製石剣



町屋遺跡の弥生・古墳時代の主要遺構配置図(1/2,000)

朝日（あさひ）遺跡

所　在　地　清須市ほか
（北緯35度13分18秒　東経136度51分18秒）
調査理由　名岐道路・県道高速清洲一宮線及び県道高速名古屋朝日線
調査期間　平成19年４月～平成19年７月
調査面積　348㎡
担　当　者　赤塚次郎・永井宏幸

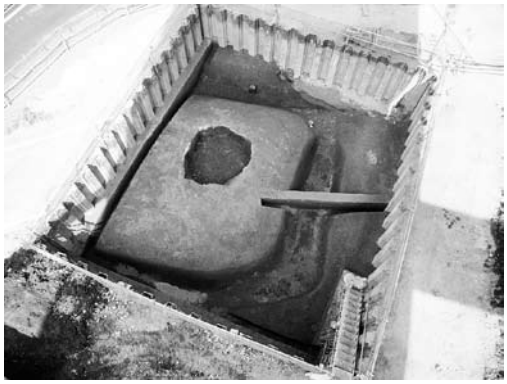


調査地点（1/2.5万「清洲東」）

調査の経過　本遺跡は，愛知県清須市域を中心に拡がる愛知県下を代表する弥生時代の大集落である。遺跡は中央部に存在する谷状地形をはさんで，北と南側に居住区が営まれ，さらにその周囲には広く墓域・生産域が展開する。調査は，名岐道路・県道高速清洲一宮線及び県道高速名古屋朝日線に伴う事前調査として，国土交通省中部地方整備局愛知国道事務所・名古屋高速道路公社より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。本年度は，348㎡を対象として，07Ba区・07Bb区・07Bc区・07D区の4調査区を設定し，調査を行った。

調査の概要　今回の調査区07Bbは，北集落環濠帯に近接する弥生中期を中心とした方形周溝墓群（北墓域）が展開する地区である。基本層序は，朝日U層（古墳中期）・M層（古墳前期）・H層（弥生後期・古墳早期）の水平堆積層が存在し，全体に粘り気の強い土質が確認できる。その中で特に朝日H層が，周溝墓に伴う各周溝内に厚く堆積する状況が確認できた。検出できた主要遺構は，中期後半を中心とした5基の方形周溝墓と，加えてその下層において竪穴建物・廃棄土坑等が展開する。方形周溝墓の下層に見られた土坑・建物等は，周辺域に中期前半期を中心とした居住域が散在していた点を示唆するものであろう。ところで北墓域としては，貝田町式後半期を中心として設定されていくようであり，調査区周辺では，一辺5・6mの比較的小型の周溝墓群が展開する地区と位置づけることができる。調査区内では墳丘の主軸を異にする２つの周溝墓群が確認でき，一つは調査区北側に存在する旧調査区SZ149（002SZ）とその北側に展開する03Bc区SZ02である。次に調査区中央部から南には，001SZ・003SZ・005SZが配置されており，周溝墓の軸線と主体部の主軸とに相関関係が認められる。

また調査区南に存在する003SZと005SZの間には，陸橋部を共有する状況が認められた。特に003SZの南東陸橋部では，基盤黄色シルトによる混合斑土が丁寧に貼付けられており，墳丘盛土の変化に伴い傾斜路を整備していく様子がうかがえる。さらにその斜面両端には加工された材や，山中式I式期の高杯の配置が認められた。こうした状況は，07D区004SZでも確認されており，家族墓としての意識とその墓前祭の具体的な事例を示すものとして大変興味深い。（赤塚次郎）



07D区　004SZ全景



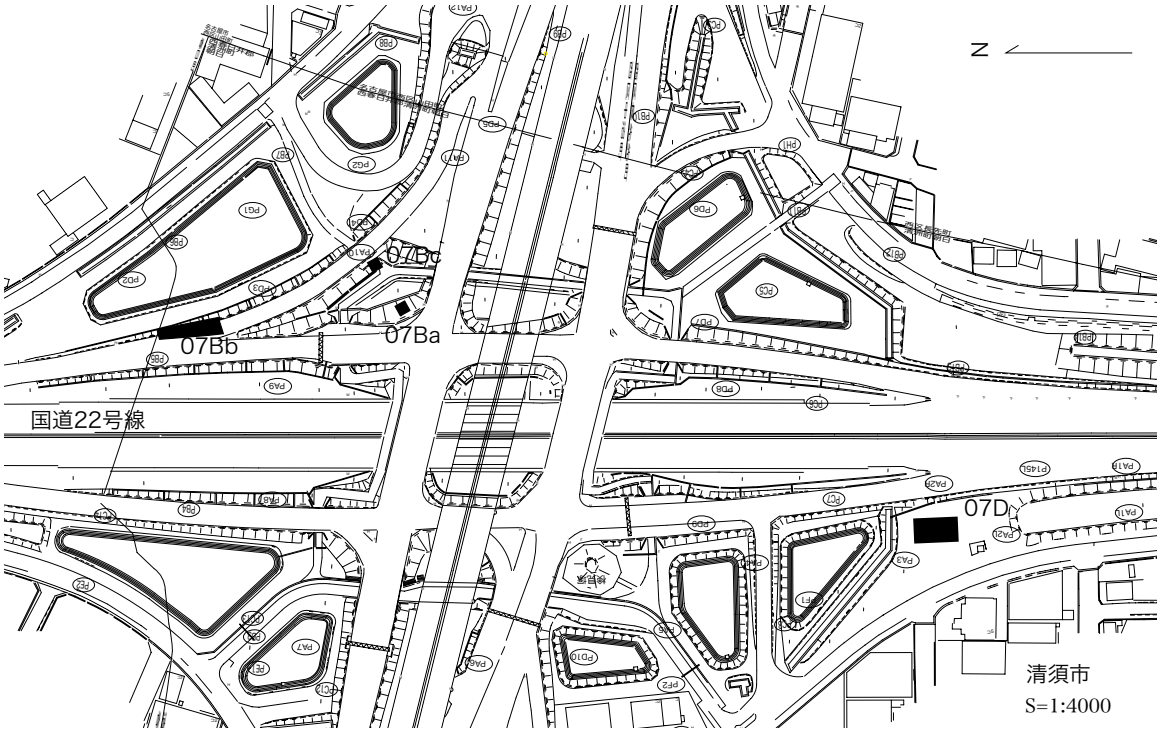
07Bb区　全景



07Ba区　調査風景



07Bb区　003SZ主体部調査風景

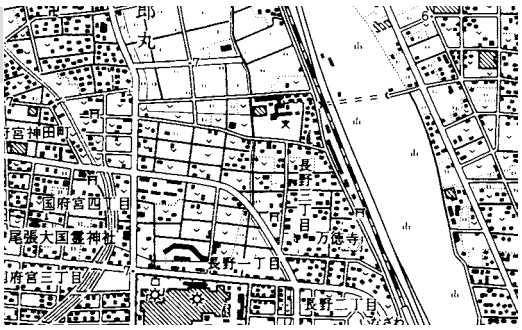


東名阪自動車道路

朝日遺跡調査区 2007

長野北浦遺跡（ながのきたうら）

所在地　稲沢市長野
（北緯35度15分25秒 東経136度49分04秒）
調査理由　都市計画道路稲沢西春線建設
調査期間　平成19年４月～平成20年３月
調査面積　5,500㎡
担当者　石黒立人・松田訓・樋上昇・蔭山誠一・永井邦仁・早野浩二



調査地点（1/2.5万「一宮」）

調査の経過　長野北浦遺跡の発掘調査は、都市計画道路稲沢西春線の建設に伴う事前調査として、愛知県建設部都市整備課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。

立地と環境　本遺跡は稲沢市東部に位置し、西には古墳時代～古代の著名な遺跡である塔の越遺跡が隣接している。地形的には、三宅川左岸の後背湿地にあたり、遺構検出面での標高は約4mである。

調査の概要　調査区は東からA～D区に分かれる。検出した遺構は古墳時代・飛鳥～奈良時代・鎌倉～室町時代・江戸時代以降の4時期である。

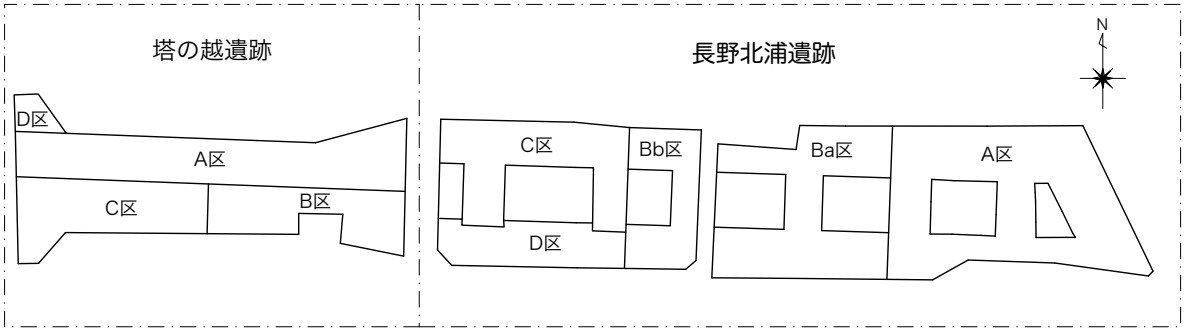
古墳時代　方墳・円墳各1基と竪穴建物5棟のほか、溝・土坑数基がある。

なかでもBa区で確認した方墳は、すでに削平されていたが、墳丘の一辺が約25m、周溝幅約10mを測る大型の古墳である。東と西の周溝からは、4世紀前半（松河戸Ⅰ式期）の土器がまとまって出土した。南側約半分が調査区外となることから全貌は不明だが、伊勢湾周辺の前期古墳では、後方部の一辺が25mで全長が40m前後の前方後方墳が多くみられることから、本古墳も全長40mクラスの前方後方墳である可能性を考えておく必要があろう。

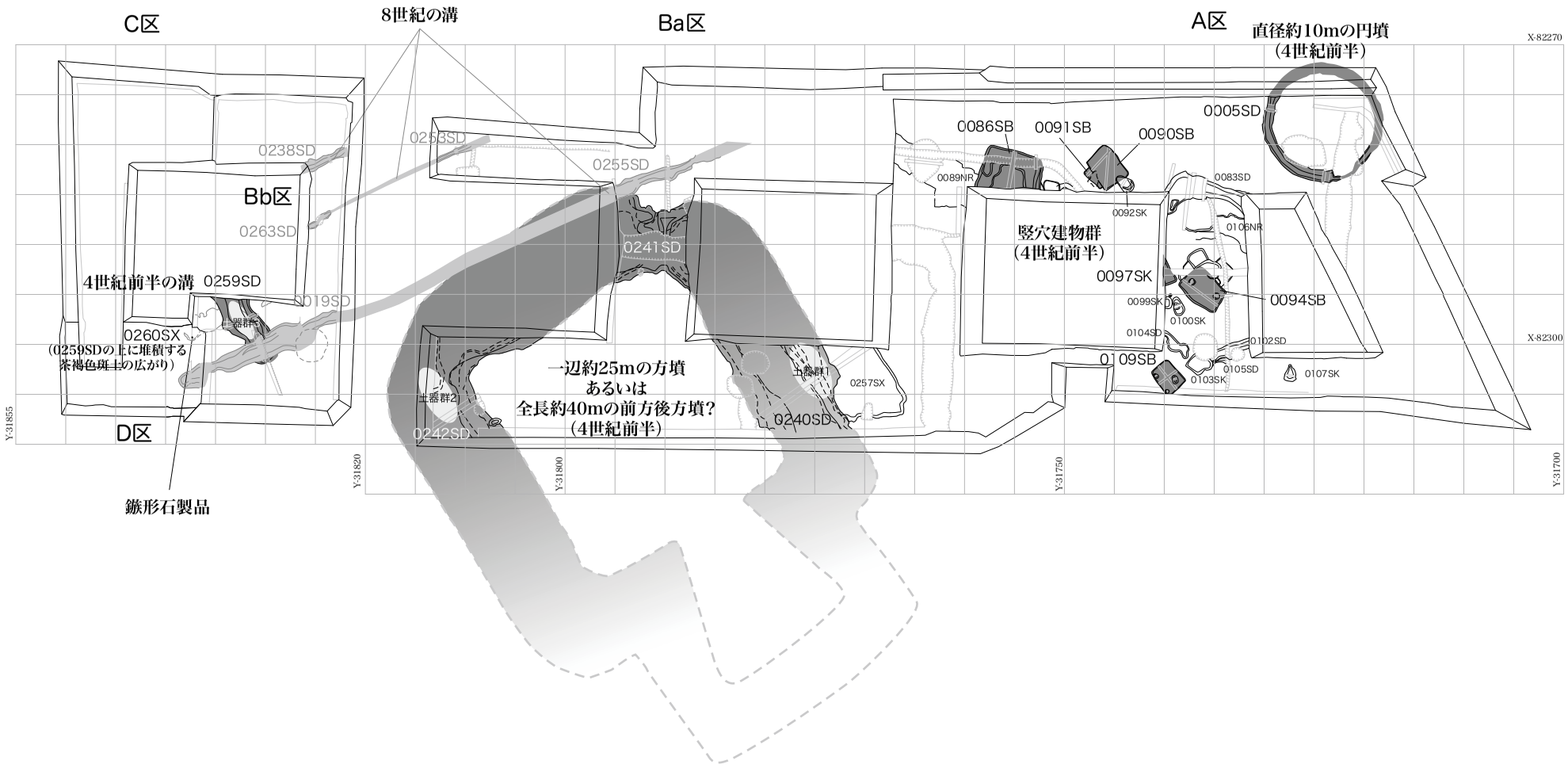
A区東端部で確認した円墳は直径約10mで、やはり4世紀前半に属する。

Bb区では、Ba区の方墳と同じ主軸方向をもつ溝0259SDがあり、ここからも4世紀前半の土器がまとまって出土しており、古墳の周溝である可能性が高い。

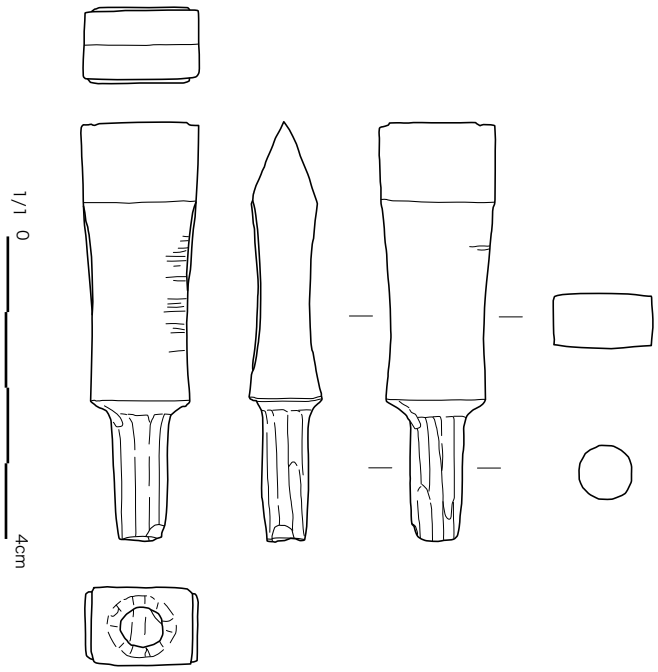
さらにその西のD区0260SXからは、緑色凝灰岩製の鏃形石製品が出土した。この遺構は0259SDの上に乗る不整形な2次堆積土の広がりであり、須恵器も出土している。鏃形石製品は鑿頭形とされるもので、奈良県桜井市メスリ山古墳や三重県伊賀市石山古墳の出土例に近似しており、愛知県下では初例となる（鏃形石製品としては犬山市青塚茶臼山古墳に次いで2例目）。おそらく本来は、Ba区の大型方墳（前方後方墳？）に副葬されていたものであろう。



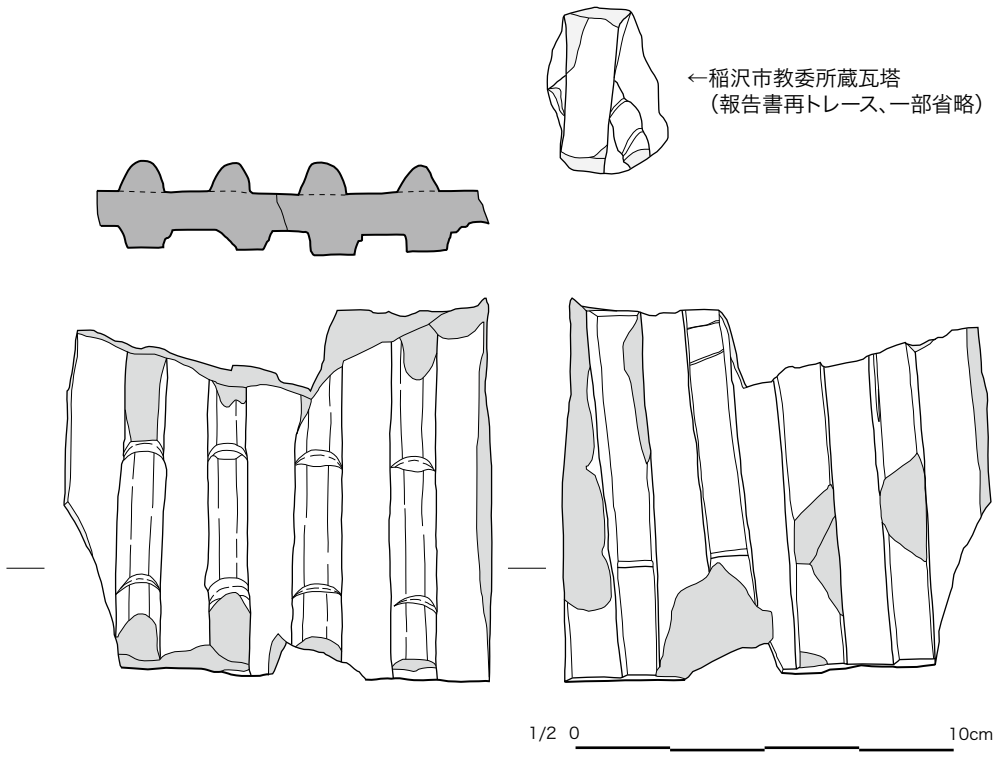
長野北浦・塔の越遺跡調査区位置図　（1/2,000）



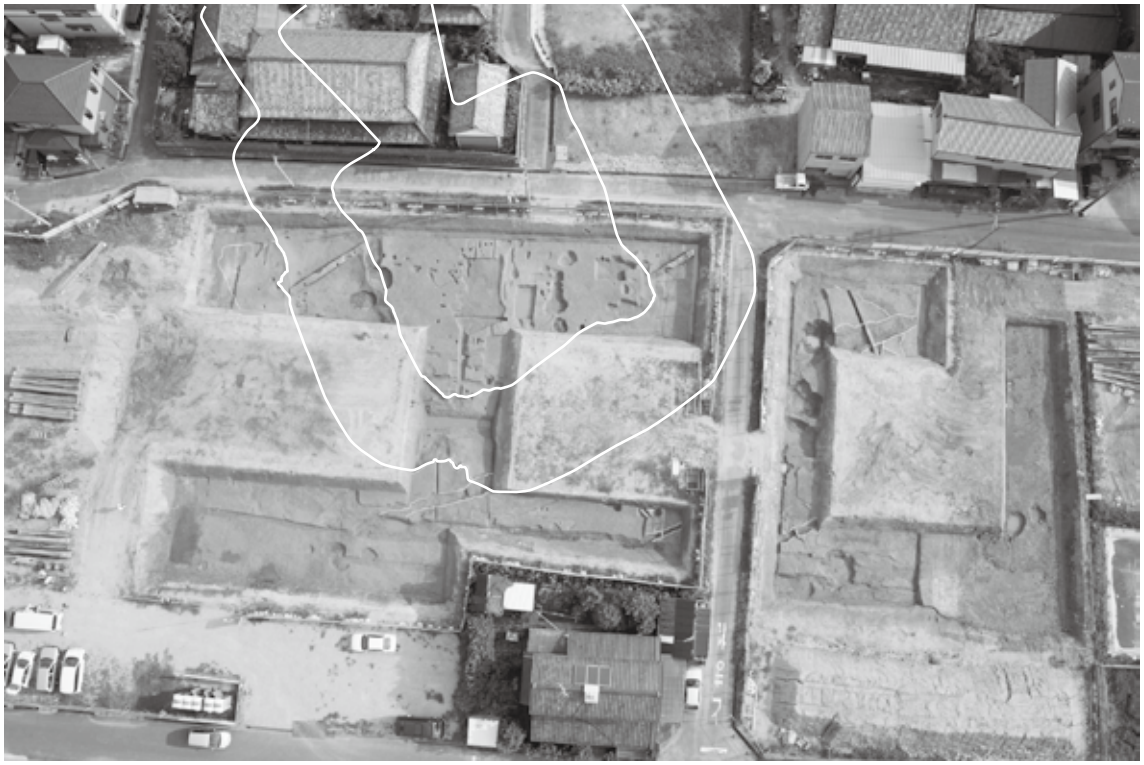
古墳～奈良時代遺構配置図（破線は西上免古墳による復元）（1/ 600）



0260SX出土鏃形石製品　S=1/1



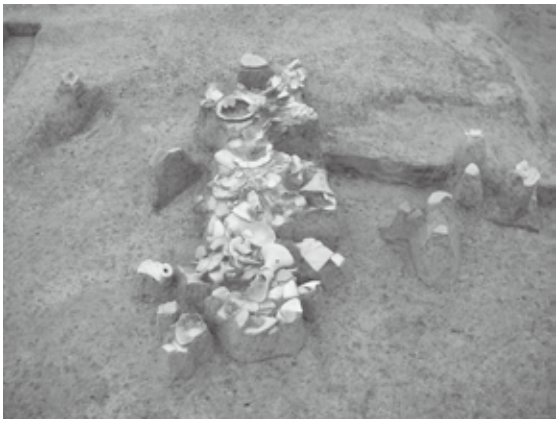
長野北浦・塔の越遺跡出土瓦塔　S=1/2



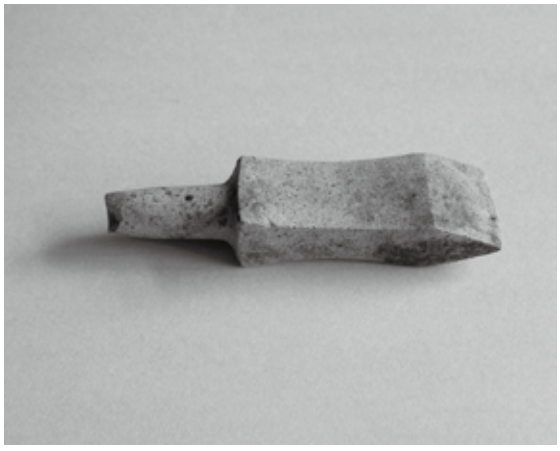
Ba区大型方墳or前方後方墳？全景（北から）



A区円墳(北西から)



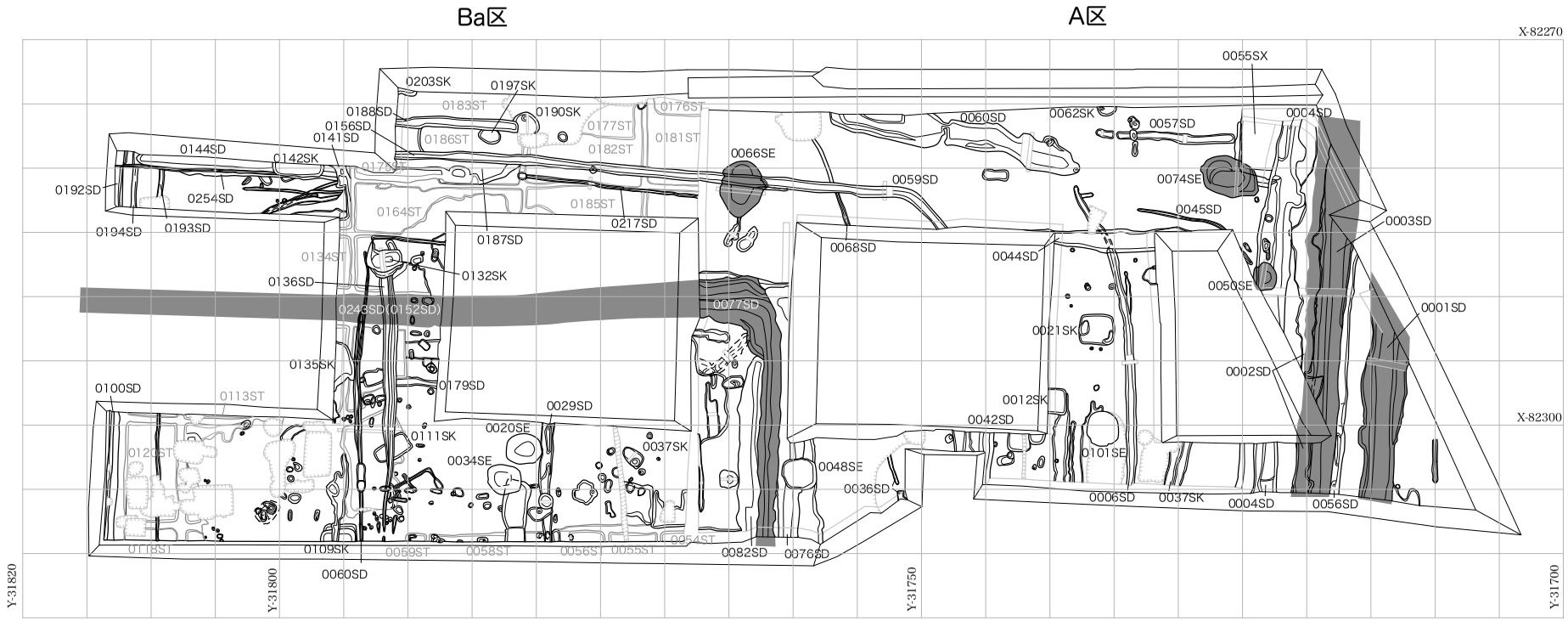
Bb区0260SX土器群3（北から）



鏃形石製品



D区鏃形石製品出土状況（南から）



鎌倉～江戸時代遺構配置図-1　(1/ 500)

このほか、A区の円墳より西側で竪穴建物を5棟と土坑数基を確認した。時期は古墳と同じ4世紀前半である。しかし、0086SB以外はいずれも小規模なものであり、棟数も少ないことから、大型方墳の被葬者の居住域とは考えにくい。

飛鳥～奈良時代

大型方墳の東周溝（0240SD）上層から7世紀後半の須恵器杯蓋が出土している。この時期まで墳丘が遺存していたか否かは不明だが、周溝はまだその痕跡をとどめていたことがわかる。

8世紀代には、方墳の北に3条の溝が走る。うち、最も南の溝（Ba区0255SD・Bb区0019SD）は、方墳の北周溝（0241SD）とBb区の0259SDを切って掘削されている。方位は方墳とほぼ同じで、当地の自然地形に沿っている。埋土の状況が鏃形石製品を出土した0259SXに近いことから、この頃に古墳が削平された可能性が高い。また、Ba区0187SD（江戸時代）からは8世紀前半の畿内系土師器（高杯）、同じくBa区0243SD（13世紀）から8世紀後半の瓦塔片が出土している。うち、瓦塔片は塔の越遺跡A区から出土したものと接合することから、13世紀（鎌倉時代）頃、長野北浦遺跡から塔の越遺跡にかけて大きく地形が改変されていることがあきらかとなった。

鎌倉時代以降

弘長3（1263）年に、本遺跡の南約100mに所在する真言宗の古刹万徳寺が再興される（伝承では創建は768年）。その時期、本遺跡には東西・南北方向に走る溝が新たに掘削される。A区001～004SDは、万徳寺境内の東を区画する溝の延長にあたり、鎌倉時代以降、現代にいたるまで再掘削されて機能し続ける。

A区0077SD・Ba区0243SD・Bb区0205SDはコの字状にめぐる一連の溝で、東西幅は約85mを測る。内部には井戸が多数あり、屋敷地の区画溝と考えられる。時期は13世紀代である。この屋敷地の北側には、同時期と推定される水田区画を確認している。

この土地利用のあり方は、天保12（1841）年に記された絵図とほぼ同じであることから、鎌倉時代以降近世にいたるまで、本遺跡周辺の景観はさほど変化しなかったと考えられる。

（樋上　昇）



鎌倉～江戸時代遺構配置図 -2　（1/ 500）

塔の越（とうのこし）遺跡

所　在　地　稲沢市長野
（北緯35度15分25秒 東経136度48分57秒）
調 査 理 由　都市計画道路稲沢西春線建設
調 査 期 間　平成19年４月～平成20年３月
調 査 面 積　2500㎡
担　当　者　石黒立人・樋上昇・永井邦仁・早野浩二



調査地点（1/2.5万「一宮」）

調査の経過　塔の越遺跡の発掘調査は、都市計画道路稲沢西春線建設にかかる事前調査として、愛知県建設部都市整備課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。調査期間は平成19年４月～平成20年３月、調査面積は2,500㎡である。

立地と環境　塔の越遺跡は、市域を蛇行しながら南流する三宅川左岸の自然堤防上に立地する。遺跡周辺の標高は約６ｍである。遺跡の東には長野北浦遺跡、西には尾張国府跡が隣接する。遺跡は、稲沢市教育委員会によって1979年に緊急調査、1985・86年に第１次・第２次の発掘調査が実施され、第１次・第２次調査においては、古墳時代前期の土器群、古墳時代中期の円墳等が検出されている。

調査の概要　今回の塔の越遺跡の発掘調査においては、古墳時代、古代、中世、近世の遺構と遺物が検出された。主体は古代で、出土遺物量も最も多い。

古墳時代　古墳時代の遺構として、調査区東部をやや蛇行しながら通じる大溝0050SD等が検出された。0050SDは、最大幅約10m、深さ約0.5mを計測し、古墳の周溝とも推測される。0050SDを古墳の周溝とすると、古墳は、径約24mの円墳として復原される。また、0050SD周囲の土堤状の高まりでは、盛土中に埋設された土器集積0741SXが確認された。0741SXは、S字甕２個体、直口壷１個体、小型丸底壷４個体によって構成される。土器の型式は、松河戸Ⅰ式初頭に相当する。同じく0050SDの周囲では、直口壷１個体を埋設した0256SK、調査区西部では竪穴状の窪地0673SBにS字甕１個体を埋設した0582SKも検出されている。土器の型式は、0741SXと同じく、いずれも松河戸Ⅰ式初頭に相当する。その他、大型の土坑等も確認されたが、出土遺物はごく少なく、性格を判断する材料は乏しい。

古代　古代の遺構として、調査区西半を中心として多数の柱穴を確認し、数棟の掘立柱建物を復原した（一部、中世の建物を含んでいる可能性がある）。柱穴からはおよそ岩崎17号窯式～黒笹90号窯式の須恵器、灰釉陶器が出土していることから、遺跡においては、７世紀から９世紀を通じて掘立柱建物を中心に構成される集落が展開していたことが推測される。柱穴には長軸約1.2m、深さ約0.8mの大型のものもあるが、柱痕が遺存するものは少ない。他の古代の遺構としては、弧状に通じる溝、竪穴状の遺構等が確認されている。

出土遺物としては、須恵器、灰釉陶器、土師器に加えて、円面硯、瓦塔、製塩土器等がある。また、土錘の出土が多く、瓦が散見されることも特徴的である。瓦塔は、長野北浦遺跡出土の個体と接合し、1979年調査出土の個体とも同一個体とみられる。

中世～近世　中世の遺構は全体に希薄である。主要な遺構は、調査区中央付近において検出した12世紀後半の井戸0400SE、15世紀前半の井戸0690SE、調査区西部において検出した大溝0021・0022SD、調査区に散在する方形土坑等である。0400SEは、長軸約2.5mの方形縦板組隅柱式井戸で、方形の曲物を伴っていた。一方、0690SEは、径約5.5mで、構造物は何ら

確認されなかった。0021・0022SDは幅約３ｍで、上位は近世・近代を通じて再掘削される（007SD・008SX）。なお、方形土坑0425SKからは、古瀬戸灰釉貼付牡丹文筒形香炉が出土した。

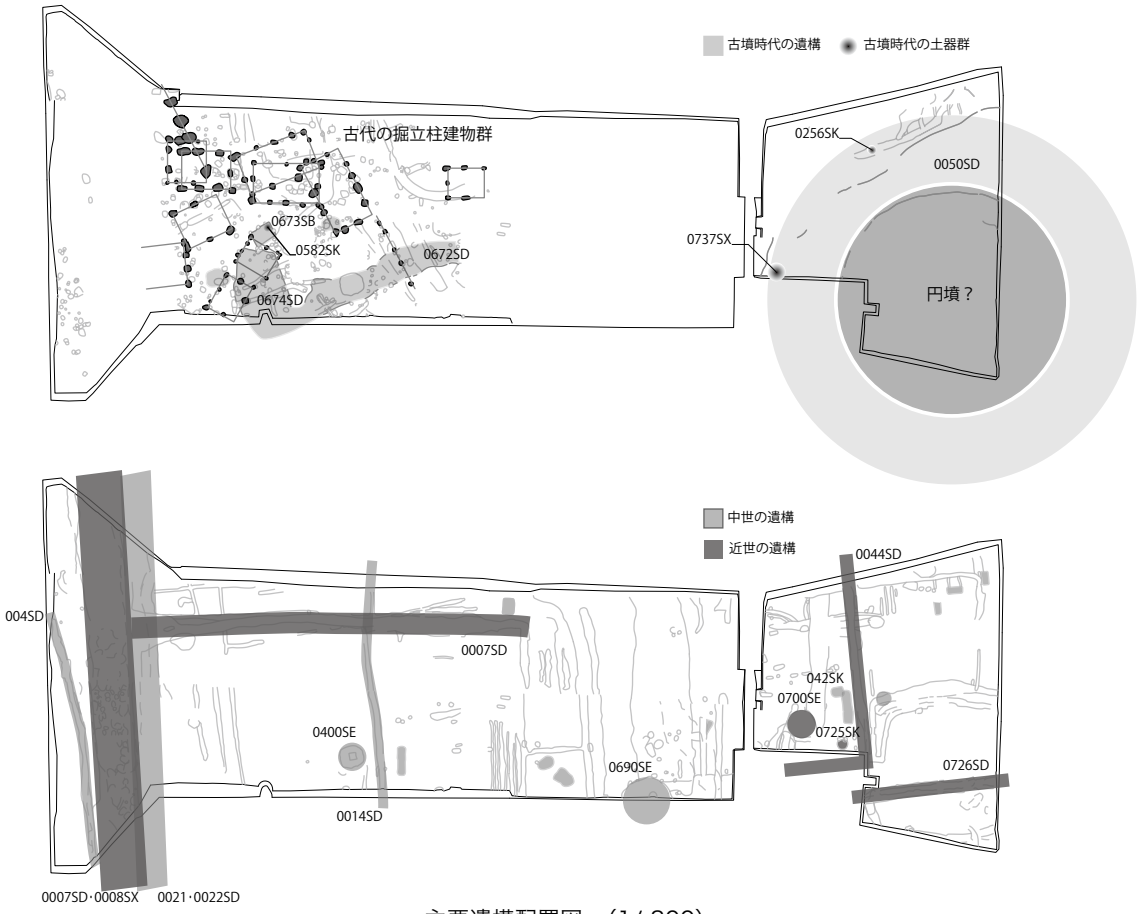
近世の遺構としては、調査区東半を中心に16～17世紀の区画溝、井戸等が確認された。調査区を南北に通じる0044SDからは、焙烙鍋、型打皿、丸碗、石硯等の遺物が豊富に出土した。0700SEは径約３ｍの結桶井戸であるが、結桶は抜き取られていた。その他、調査区中央において、近世以降の水田を検出した。

ま と め　今回の調査で、塔の越遺跡は、古墳時代、古代、中世～近世の複合遺跡であることが明らかとなった。また、調査区の西半は古代、東半は中世～近世の遺構がそれぞれ主体であることから、長野北浦遺跡と塔の越遺跡の実質的な境界は、今回の調査区の中央付近に求められることになると思われる。

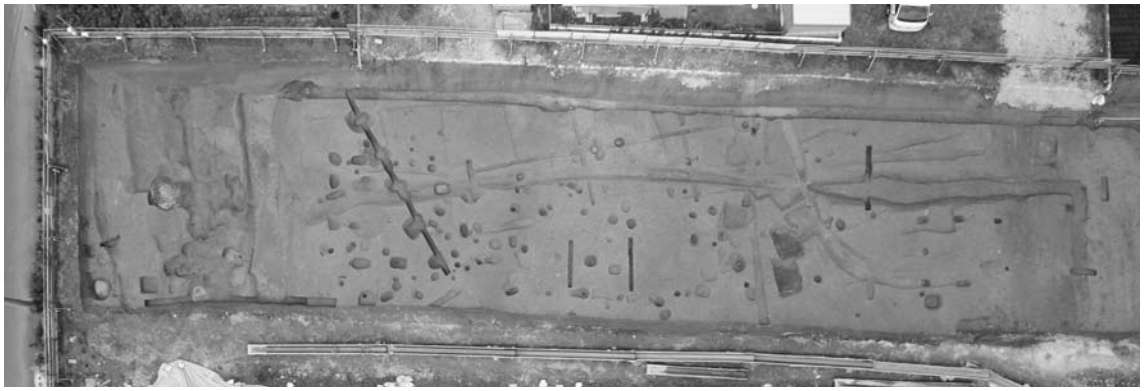
古墳時代の大溝0050SDが古墳の周溝であるとすると、長野北浦遺跡から塔の越遺跡にかけて、連続して前期の古墳が点在する景観も復原されることになる。土器集積0741SXは、第１次調査の土器溜りSX01と出土状況が類似することも注意される。

古代の遺構と遺物は、今回の調査成果の主体となるもので、遺構、遺物の内容からは、遺跡の西に隣接する尾張国府跡との密接な関係も推測される。また、７世紀から集落形成が活発化する点は大いに特筆される。

中世～近世の遺構は、調査区東半を中心に展開する。これらは、長野北浦遺跡から連続する遺構群と推測される。　（早野浩二）



主要遺構配置図　（1/ 800）



調査区北西部



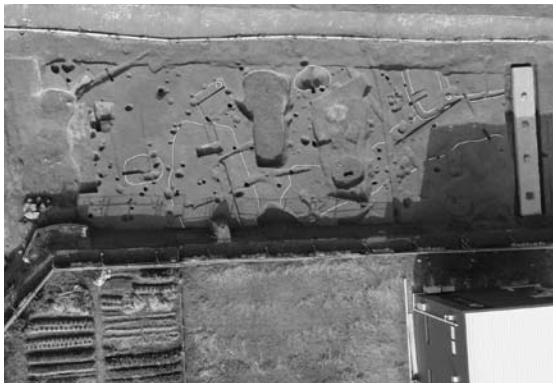
古代の掘立柱建物群



調査区北東部/0050SD



調査区南西部



調査区南西部/0672・0674SD周辺



調査区南東部/0050SD周辺



0050SD



0582SK



0741X (1)



0741SX (2)



大型の柱穴



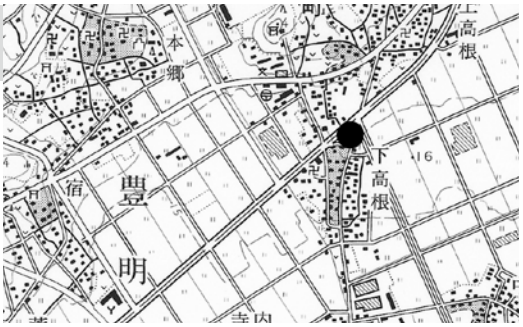
0400SE



0044SD

薬師ヶ根（やくしがね）遺跡

所　在　地　豊明市沓掛町
（北緯35度04分00秒　東経137度01分46秒）
調 査 理 由　県道春木沓掛線道路改築工事
調 査 期 間　平成18年５月～６月
調 査 面 積　600㎡
担　当　者　小澤一弘・永井邦仁



調査地点（1/2.5万「知立」）

調査の経過　発掘調査は、県道春木沓掛線改築工事の事前調査として、愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じた委託事業である。平成18年度に、工事予定道路が県道57号と交差する北側の地点（06調査区、750㎡）を発掘調査し、奈良時代末の須恵器の集積や中世の溝、掘立柱建物および中世前半の遺物の出土を確認した。今年度は交差点南側に調査区（07調査区）が設定された。

立地と環境　遺跡は名古屋市南東部の丘陵が境川に向かって下る斜面地端部に立地し、標高約16～19mである。遺跡範囲には埋没谷が一部含まれ、06調査区内の埋没谷では居住地の遺構はなかったが、古代～中世の土器や陶器が多数出土する包含層が確認された。07調査区はその埋没谷の延長に位置する。

調査の概要　06調査区から続く丘陵端部の斜面は、07調査区内では地山を大きく切り込む削平を受けており残っていなかった。削平地（013SX）からは06調査区と同様の中世前半を中心とする遺物が出土しており、集落がここまで広がっていたことをうかがわせる。削平面は標高約14.4mであり、それ以下の標高では埋没谷の遺物包含層が残存していた（001SX）。調査は砂礫の混じる層（001SX上層）を掘削後に井戸（002SE）などを検出し、その後黒色粘土層（001SX下層）の掘削を進めた。

須恵器の大量廃棄　001SX上層は中世の遺物を多く含むが、比較的残りの良い須恵器が多数出土した。それは上層と下層の境近くで特に顕著である。時期は折戸10号窯式期を中心とし、器種は蓋・杯・盤・高盤・薬壺・甕・水瓶などがある。またわずかながら融着したものや窯道具などもある。これら須恵器の評価については、窯とは別の場所における選別の過程で廃棄されたものと推測しているが、窯跡の存在についても考えておきたい。なお001SX下層下にはいくつかの窪地状の遺構がありその位置と須恵器の集中域がほぼ重なることから、下層遺構


井戸と溝検出状況


井戸断ち割り調査の状況

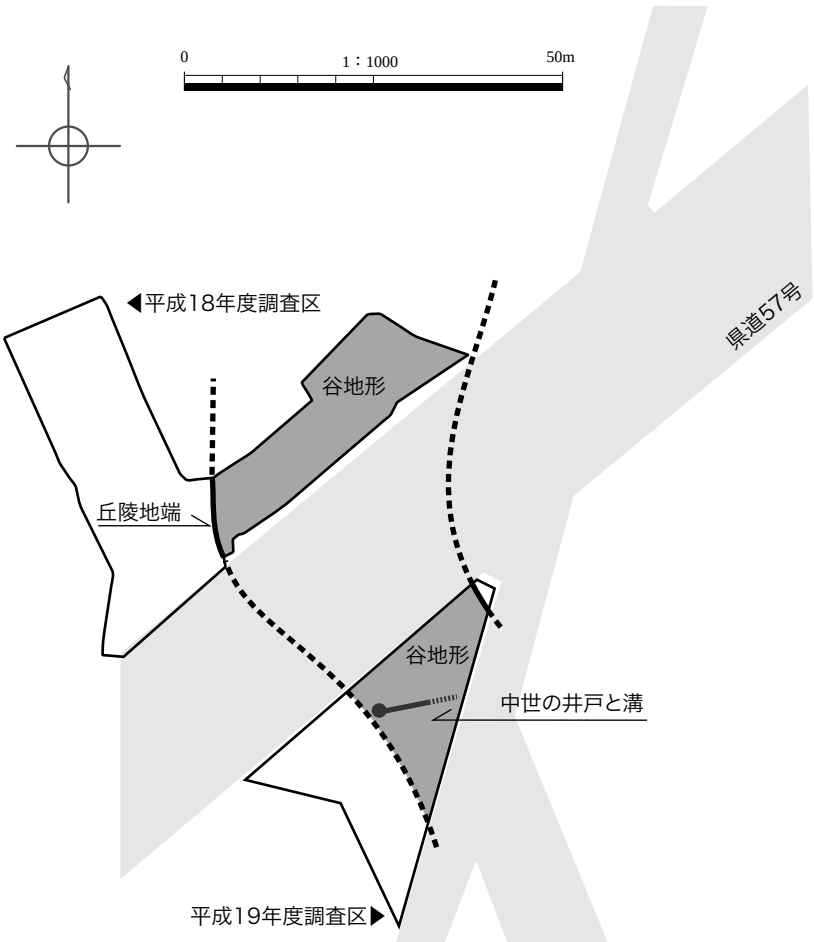
に影響されて窪地状となった下層上面に土器溜まりができたものと思われる。

なお、07調査区では黒笹90号窯式期から東山72号窯式期の灰釉陶器椀・皿が出土した。この時期の遺物は06調査区では少数であり対照的である。また須恵器・灰釉陶器に墨書されたものが散見される点も特記できる。

中世の井戸　001SX下層上面で検出した002SEからは排水用の小溝（003SD）がほぼ東西方向にのびる。002SE掘り方の縁には拳大の円礫が貼り付けられ、全周の約40%が残存していた。装飾的な意味合いが強いと思われる。井戸の側構造は、四隅に柱をもつ縦板構造で、縦板は3～6cmの厚さがあり、特に北面側板は戸板から転用されたとみられる一枚板である。掘り方の深さは確認面から約60cmと浅く、底から曲物の出土はなかった。掘り方内から山茶碗が出土したことから中世前半に構築されたと推定する。

遺跡の特徴　07調査区においても須恵器の大量廃棄に直接かかわる遺構を確認することはできなかった。しかしその出土範囲からすると中世集落遺構と重複するようにして立地した可能性が高く、遺物の整理作業を通じてこれを究明する必要がある。また中世集落については、鉄滓から鍛冶施設の存在、青磁や白磁片が目立つ点が注目され、江戸時代末期の村絵図の遺跡該当箇所に「城跡」の記載があることとの関連が問題になってこよう。

（永井邦仁）



調査区位置図　（1/1,000）

桑下城跡（くわしたじょうあと）

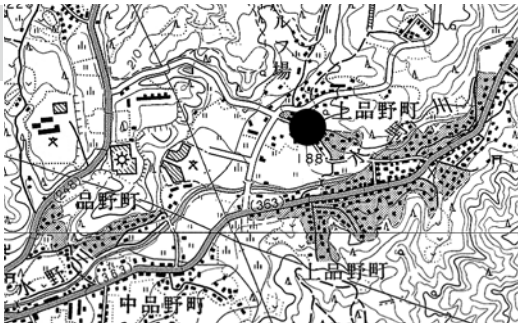
所　在　地　瀬戸市上品野町
（北緯35度15分24秒 東経137度08分19秒）

調 査 理 由　国道363号線改良工事

調 査 期 間　平成19年８月～20年３月

調 査 面 積　4,000㎡

担　当　者　小澤一弘・宇佐見守



調査地点（1/2.5万「多治見・猿投山」）

調査の経過　本遺跡は国道363号線の改良工事に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成19年８月から20年３月にかけて実施した。調査面積は4,000㎡で、城の搦手にあたる部分の調査になる。

なお、平成17年1月から3月にかけて実施した1次調査では、丘陵西端部の1,000㎡を調査し、南側と西側に曲輪と考えられる平場多数と北側に武者走りと思われるわずかな平坦面を確認している。

立地と環境　桑下城跡は瀬戸市の北東部にある品野盆地の北東、水野川と蟹川にはさまれた標高約210mの丘陵上に立地する平山城で、規模は東西約220m、南北約100mを測る。

周辺の遺跡としては、西の低地に上品野蟹川遺跡（縄文～戦国）、東の谷を挟んだ丘陵上に桑下東窯跡（戦国）、さらに東の丘陵斜面に上品野西金地遺跡（縄文～江戸）、また、南東の水野川を挟んだ標高約330mの尾根線上に品野城が所在する。

江戸時代の地誌類によれば、桑下城は品野城主松平内膳（信定）の家老である永井（長江）民部の居城とされている。蓬左文庫には、正保年間から承応年間（17世紀半ば）にかけて描かれたと考えられる古城絵図が品野城とともに残っている。

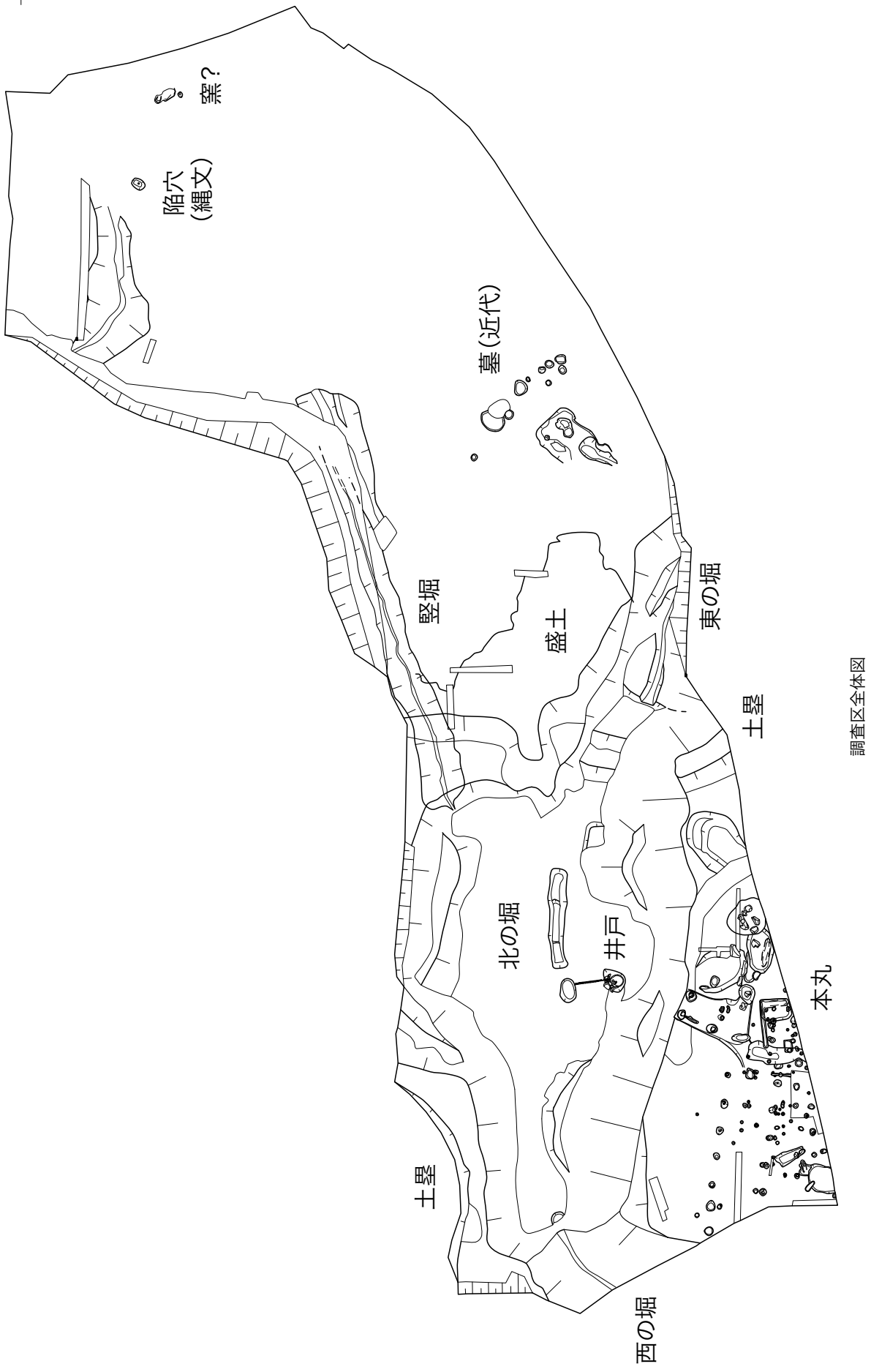
桑下城が所在する品野は、美濃・三河国と国境を接し、さらに信濃国に続く中馬街道が通っているため、織田・松平（松平衰退後は今川）の覇権争いの最前線となった地である。そのため、城は上品野の集落を見下ろす南側を重視し、多数の曲輪を配置している。また、桑下城を館城（平時の城）、品野城を詰めの城（戦闘時の城）と関連づける考えもある。

調査の概要　調査は、調査区をＡ区（本丸の北部分と本丸を囲む堀）とＢ区（本丸北東方向にある平場と東に続く斜面）に分けて実施した。

本　　丸　西端と北端中央は、平場の確保と西の堀の急峻化を目的とした埋め立てがなされており、西端の埋め立ては深いところで2mになる。また、北東端に残存する土塁の一部を断ち割った結果、土塁は土盛りにより作られたのではなく、削り出して作られていることが判明した。これらのことから、本丸は丘陵頂部を削平し、その時に出た土砂で浅い谷を埋めて作られたと考えられる。なお、盛土の下や土塁の中から瀬戸産の陶器などが出土していることから、築城に先行する人の営みないし城の大幅な改修が想定できる。

本丸北東端に現存する土塁は幅約5m、高さ約1.5mを測る。この城の北東部は丘陵が続き、防衛上最も手薄な場所であるため、北東部のみ土塁を築いたとも考えられる。しかし、本丸北西端に遺構が全く展開しないことと、北側にある曲輪が本丸からの大量の土砂で短期間に埋められていることから、本丸北側には土塁が巡っていた可能性が高い。

本丸からは、大小合わせて100近い遺構を検出したが、ほとんどは直径60cm以下のピットであり、その多くが掘立柱建物の柱穴と考えられる。しかし、調査が本丸の北部分に



調査区全体図

限られているため、全体がわかる掘立柱建物は北西部分で検出した１間×４間の建物1棟のみで、他には、南端中央で検出した雨落ち溝と埋土に炭化物を多く含む方形土坑を伴う１間×１間以上の建物1棟が想定できるにすぎない。

また、北端中央で検出した1間×1間の礎石建物は、地表面を一段低く掘り下げた場所に作られており、その凹みは南西と南東が開いて通路状になっている。建物直下の曲輪で石組みの井戸を検出しており、その位置から礎石建物を井戸櫓と考えることもできるが、下の曲輪で櫓の礎石を確認することができなかったことと、井戸に付属する施設として、2本の竹でつながった水溜用の土坑を検出していることから、礎石建物は下の曲輪に行くための門であった可能性が高い。

なお、下の曲輪から墨で文字が書かれた川原石が数点出土した。文字は「氏」「多」「那」「忍」「悉」など一石に一字書かれており、一字一石経と考えられるが、出土範囲は散漫としている。また、金属製品として小柄が出土した。

他には、南西部分で屋外炉と思われる集石遺構と北東部分で廃棄土坑である大型土坑を3基（004SX・005SX・071SX）検出した。071SXは円形をした浅い土坑で、陶器類が多数出土した。004SXは東西に長い楕円形をした浅い土坑で、人頭大の円礫が多数出土した。円礫の大部分は花崗岩だが、被熱により赤く変色しているものが多い。また、004SXの下層で井戸の可能性がある円形をした深い土坑（088SE）と東西に長い楕円形をした浅い土坑（087SX・090SX）を検出した。088SEの炭化物層からは、巨石や陶器類が投棄された状態で出土した。090SXは礎石建物から続く通路の一部であるが、底から緑黒色をした拳大の川原石が多数出土した。これら大小の石は、他所から持ち込まれたものである。使用目的を考えると、土塁の土留め、石つぶて、庭石などの可能性がある。当時本丸北東部に土塁を築山に見立てた枯山水の庭園が作られており、005SXなどの大型土坑はその庭の池の痕跡の可能性がある。

堀

調査前の地表観察でも、本丸北側にある池（水堀）につながる堀状の凹みを本丸の東西に確認することができたが、調査の結果、東西の堀は薬研堀（東の堀は一部箱堀）、北の堀は箱堀であることが判明した。そして本丸東の堀の北側に新たに竪堀を検出した。

東の堀は、幅約6.4m、深さ約2.7mを測る。北西部分は箱堀、南東部分は不整形な薬研堀をしている。南東に行くに従って浅くなり防御機能は低くなる。堀の外側（北側）には堀を掘削した時に出た土が土盛りされている。本丸の北東部分にあたる堀からは、陶磁器類



調査区遠景（北より）



本丸全景（北東より）



柱穴（002P）天目茶碗出土状況

本丸　主要遺構図

の他に金属製品・石製品・木製品が出土した。陶磁器類は中国産青磁碗・白磁皿、常滑産甕、土師質の皿・内耳鍋などの出土はあるが、大部分は瀬戸産陶器（古瀬戸後Ⅳ新～大窯2）と窯道具（匣鉢・挟み皿など）である。瀬戸産陶器は明らかな使用痕を残すものはわずかで、窯道具の大量出土とともに隣接する桑下東窯跡との関係を考慮する必要がある。金属製品では本丸側の斜面から鉄鏃が出土し、堀からは本丸から投げ入れられたかのような刺さった状態で和鏡と石臼片が出土した。木製品としては、建築部材と考えられる角材や丸太材に混じり皿や漆塗りの柄杓が堀より出土した。

西の堀は、幅約8m、深さ約3.1mを測る。きれいなV字形をした薬研堀である。底は北の堀より50cm以上高くなっており、水堀であった北の堀の水が西の堀を通って南の曲輪に流れ込まないようになっている。

北の堀は、幅約12m、深さ約4mを測る。西部分の外側に削り出しによる土塁状の高まりが見られる。中央から東部分は自然の谷地形を利用して作られている。出土遺物としては、陶器類の他に漆塗りの椀、下駄、柄杓、陽物などの木製品が出土した。

今回の調査で新たに東の堀のさらに北側に竪堀を検出した。竪堀は薬研堀をしている。一部東の堀を掘削した時に出た地山ブロックで埋められており、東の堀掘削以前から存在していたことがわかる。堀からは窯道具・土師質の皿などが出土した。この堀の検出により、従来城外と考えられていた東の堀の北にある平場が城内になることが判明した。なお、薬研堀は平場までで、東斜面になると自然の凹みになってしまう。東斜面にはさらに北側に陶器類を含む浅い溝がある。

和　　鏡　本丸北東側の箱堀の埋土下部から突き刺さった状態で出土した。周囲に土坑などを掘



菊花双鶴鏡

り込んだ痕跡がないため、堀が埋没する過程で本丸から投げ込まれたか、転落した可能性が高い。鏡は「菊花双鶴鏡」とよばれる白銅鏡で、径11.3cm、身内径11.1cm、重さ386.8gを測る。全体に黒味をおびているが、これは銅・錫・鉛の合金である青銅の中で、錫よりも鉛の成分が多いためである。背面の文様は、中央に亀形の鈕と、鈕上方に嘴を接して向かい合って飛ぶ二羽の鶴を配し、残りすべてを菊で埋め尽くしている。それぞれの文様が非常にシャープで細密に表現されている。菊は八重菊を配した重ね菊になっているが、花弁が鏑立つようになるのは、鋳型への文様施刻において、先の鋭利な篦、鉄篦を用いたためである。また、鈕の孔には、絹と思われる白い繊維が残っていたため、紐を通して使用していたと思われる。和歌山県の熊野速玉大社に所蔵されている古神宝の鏡18面の中の１つに、今回出土した鏡と文様構成や意匠が類似したものがある。速玉大社の鏡は明徳元（1390）年に将軍足利義満と諸国守護らが熊野十二社に調進した神宝類の一部で、京都の工房で製作されたと考えられている。このことから、桑下城出土の鏡も京都の同じ工房で製作されたものの可能性が高い。

ま と め　今回の調査区は、本丸の一部（北部分）とそれを囲む堀と城の周辺部の限られた地域であったが、調査の結果、桑下城は従来考えていた以上に大規模な城であることが判明した。特に本丸の２mにおよぶ整地や礎石建物、幅12m・深さ4mにおよぶ巨大な箱堀などは、当時の最先端の技術で築城されている。さらに堀から出土した和鏡が京都の将軍家ゆかりの工房で作られた可能性が高い優品であることを考えると、在地領主である長江（永井）氏の力だけでこれだけの規模の城が築けたとは考えられない。1558（永禄元）年織田信長が品野城を攻撃した際、これを撃退した武将に送った今川義元の感状が残っていることから、桑下城の改築に今川氏が関与した可能性は高いと思われる。今川氏が尾張から撤退した1560年以後利用された痕跡がないことから、桑下城は織豊系城郭登場以前の尾張の城を考える上で大変重要になる城だと言える。

（宇佐見　守）



堀　全景



屋外炉



礎石建物



掘立柱建物雨落ち溝　遺物出土状況



廃棄土坑（071SX）　遺物出土状況



廃棄土坑（004SX）　円礫出土状況



小石出土状況（手前090SX, 奥088SE）



井戸（088SE）遺物出土状況



礎石建物直下の曲輪で検出された井戸



礎石建物直下の曲輪出土の石



西の堀（薬研掘）と北の堀（箱堀）



東の堀　断面（箱堀，奥に薬研掘が続く）



北の堀　崩落部分



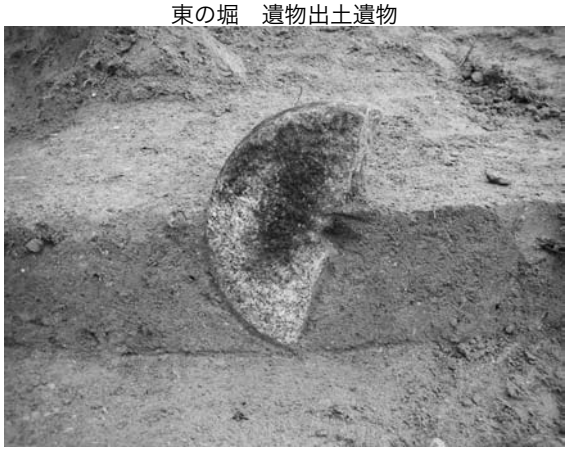
北の堀　漆椀出土状況



東の堀　遺物出土遺物



東の堀　和鏡出土状況



東の堀　石臼出土状況



竪堀　断面

寄島（よせじま）遺跡

所　在　地　安城市小川町
（北緯34度54分34秒　東経137度05分45秒）
調 査 理 由　中小河川改良工事（鹿乗川）
調 査 期 間　平成19年10月～平成20年３月
調 査 面 積　3,465㎡
担　当　者　宮腰健司・松田　訓・岡久雅浩



調査地点（1/2.5万「安城西尾」）

調査の経過　発掘調査は、愛知県建設部河川課による鹿乗川河川改良工事に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成19年10月から平成20年3月にかけて実施した。調査面積は3,465㎡であり、全体をＡ・Ｂ・Ｃの３調査区に分けて調査を行った。

立地と環境　寄島遺跡は、鹿乗川東岸の標高7mの沖積地に広がる鹿乗川流域の遺跡の一つである。周辺には弥生時代から戦国時代の遺跡が集中する。北には姫下遺跡、南には下懸遺跡があり、寄島遺跡はその間の地域を範囲とすると考えられる。また、この地域の鹿乗川沿岸は碧海台地の縁辺部にあたり、遺跡のある沖積地との比高は約4mある。周辺の台地上にはその縁に沿うように、やや北に姫小川古墳・姫塚古墳・獅子塚古墳などがあり、この遺跡の対岸に位置する加美古墳や同じ沖積地上の八ッ塚古墳（滅失）なども含めた桜井古墳群が展開している。

調査の概要　今回の調査では、全調査区で古墳時代初期から前期の集落及び墓域を想定できる遺構が確認された。出土遺物もその時期の古式土師器が中心であるが、全体的に量が少ないうえに破片が多く、器形が明瞭なものはあまり出土していない。また、全ての調査区で古墳時代の包含層の上位層において須恵器・灰釉陶器などの陶器類が少量ずつ出土したが、どの調査区でもそれらの時期の明瞭な遺構は確認されなかった。Ａ・Ｂ区では耕作土直下で少数の溝や土坑を確認したが、それらはＢ区で確認された江戸時代中頃の溝以外はどれも時期不明のものであった。この地域は近世以降耕作地として長年利用されてきたため、古代以降の遺構はほとんど失われてしまったと考えられる。

古墳時代初期から前期の集落　Ａ・Ｂ区及びＣ区最北部で竪穴住居跡と考えられる遺構を50棟ほど確認した。これらの住居跡では、生活面に明瞭な炭化物・焼土の広がりが見られる中に遺物が散布しているものや、明瞭な柱穴が残るものも多く確認されたが、大半は後世の削平により上部が失われ、方形の辺が認められる程度の状況であった。また、今回の調査では、竪穴住居の中央部をテーブル状に残して周囲を１ｍほどの幅の溝状に一度掘り下げてから床面を張っている幅の広い溝が廻る住居も12棟確認された。このような住居跡がまとまって確認されたことはあまりなくこの遺跡の特徴の一つともいえるが、こうした住居がどのような目的で作られたのかは不明であり、さらなる検討が必要である。この他、Ａ・Ｂ区では縦横に走る溝や土坑が多数確認された。これらの一部は出土遺物から住居跡とほぼ同時期とわかるものもあったが、多くは時期不明である。また、これらの溝や土坑の性格も不明である。

今回の調査では、全調査区で遺構の密度が高い箇所をそれぞれ上面と下面とに分けて掘削したが、遺構の時期的には上・下面とも同時期かやや下面が先行する程度と考えられる。出土遺物の形式変化からすると、Ｂ区及びＣ区最北部域の方がやや古く、Ａ区の中央より北側の方が新しい傾向がある。

古墳時代初期から前期の墓域

最南部のC区では、住居跡と考えられる遺構は北部で２棟確認された以外は認められず、かわって明瞭な形の方形周溝墓が２基確認された。これらの方形周溝墓は、主体部は後世の削平により失われていたが、調査区内で方形に屈曲する周溝部が明瞭に残っていた。この周溝部からの出土遺物は少量で時期決定は難しいが、これらの方形周溝墓もどちらも古墳時代初期から古墳時代前期頃のものであると考えられた。さらに、C区の最南部には幅が約11mあり、ほぼ直角に屈曲する浅い大溝が確認された。この大溝の性格は今のところ不明であるが、内側に斑土状の堆積の痕跡が認められることから、墳墓の周溝の可能性も考えられる。この大溝からの出土遺物も非常に少なく時期決定は難しいが、限られた資料から古墳時代前期頃のものと推測された。

この他、C区では方形周溝墓に切られる北西―南東方向に平行する畝状の多数の溝が確認された。これらの溝は遺物をほとんど含まず、時期・性格ともに不明である。また、南部の大溝内側の斑土状の堆積の下位層より数状の溝といくつかの土坑が確認されたが、遺物の出土はほとんどなく、遺物が出土した古墳時代初期の土坑以外はどれも時期・性格ともに不明である。

ま　と　め

今回の調査の結果から、空間的には概ねA・B区域は古墳時代初期から古墳時代前期頃までは集落域であり、これに対して最南部のC区域は墓域であったと考えられる。しかし、この区分けも明確にできるものではなく、集落域は一定であったわけではなく時期的な変遷があると推測される。集落域の移動にともなって南部が墓域化したとも考えられる。今回の調査では全体として良好な出土遺物が少なく、現時点では遺跡全体の時期的な変遷を判断するには至っていない。しかし、発掘された遺構群の状況から、この地域では古墳時代初期から前期にかけてある程度の規模の集落が継続的に展開していたと考えることができる。この遺跡の位置付けについては、周辺の諸遺跡との関連のなかで検討していく必要がある。

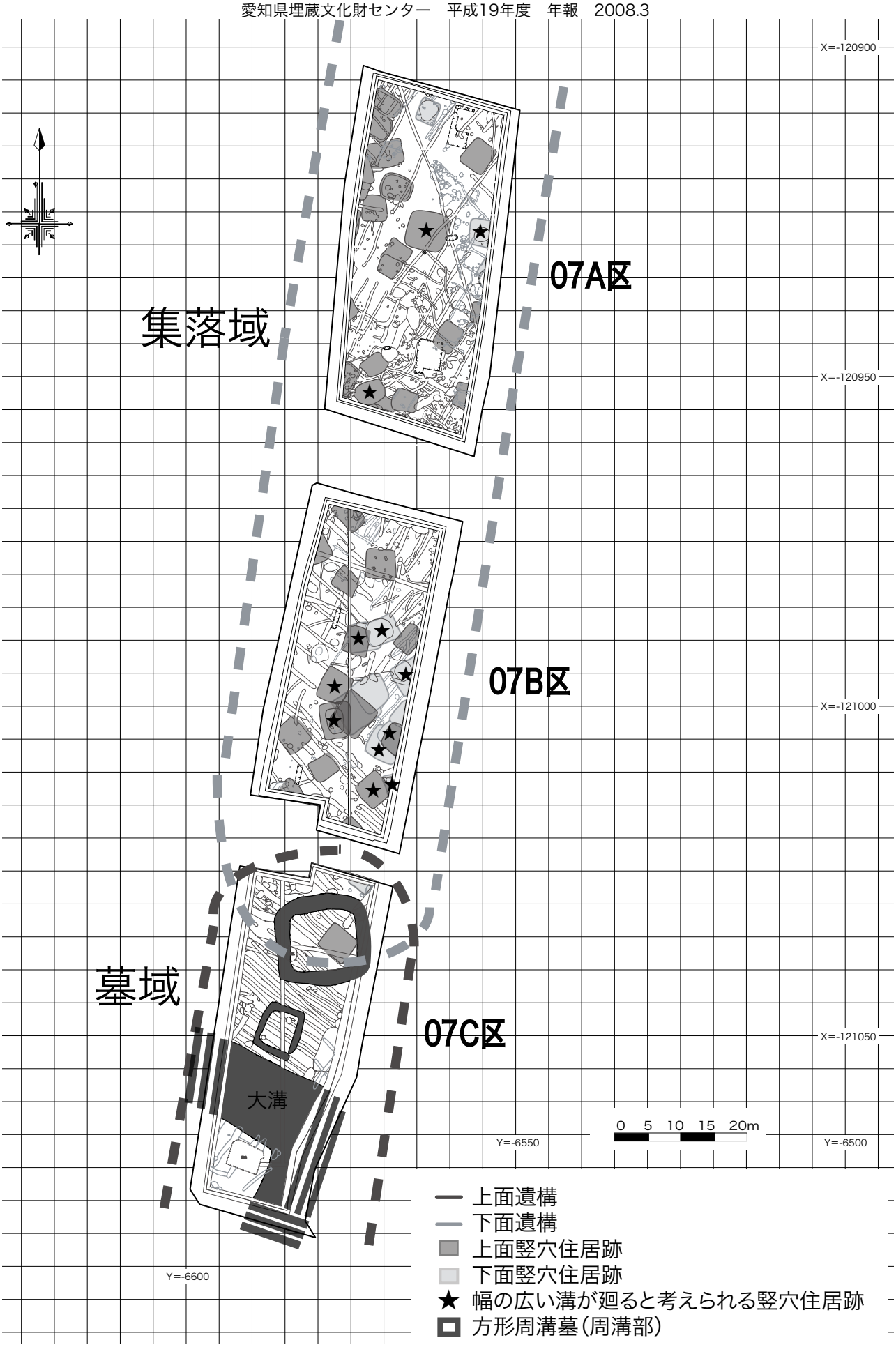
（岡久雅浩）



調査区遠景（南から）

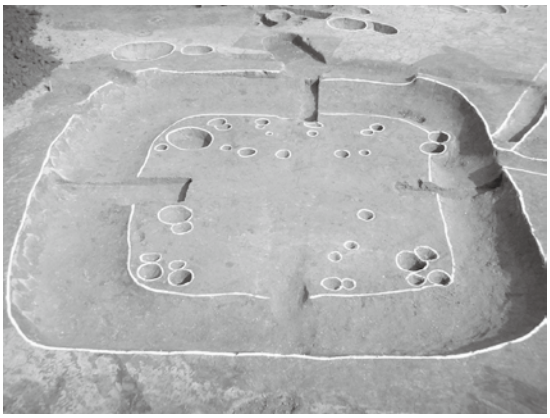


調査区遠景（東から）



寄島遺跡主要遺構配置図（1 / 800）


A区全景（北から）


A区1113SB


A区1545SB土器出土状態


B区全景（北から）


B区竪穴住居跡検出状況


B区2034SB


C区全景（北から）


C区3001SD（大溝）

ひがしなかた 東中田A古窯

所　在　地　豊橋市東細谷町
（北緯34度41分33秒　東経137度28分52秒）
調 査 理 由　一般国道23号豊橋東バイパス
調 査 期 間　平成19年６月～９月
調 査 面 積　1,591㎡
担　当　者　酒井俊彦・岡久雅浩・早野浩二



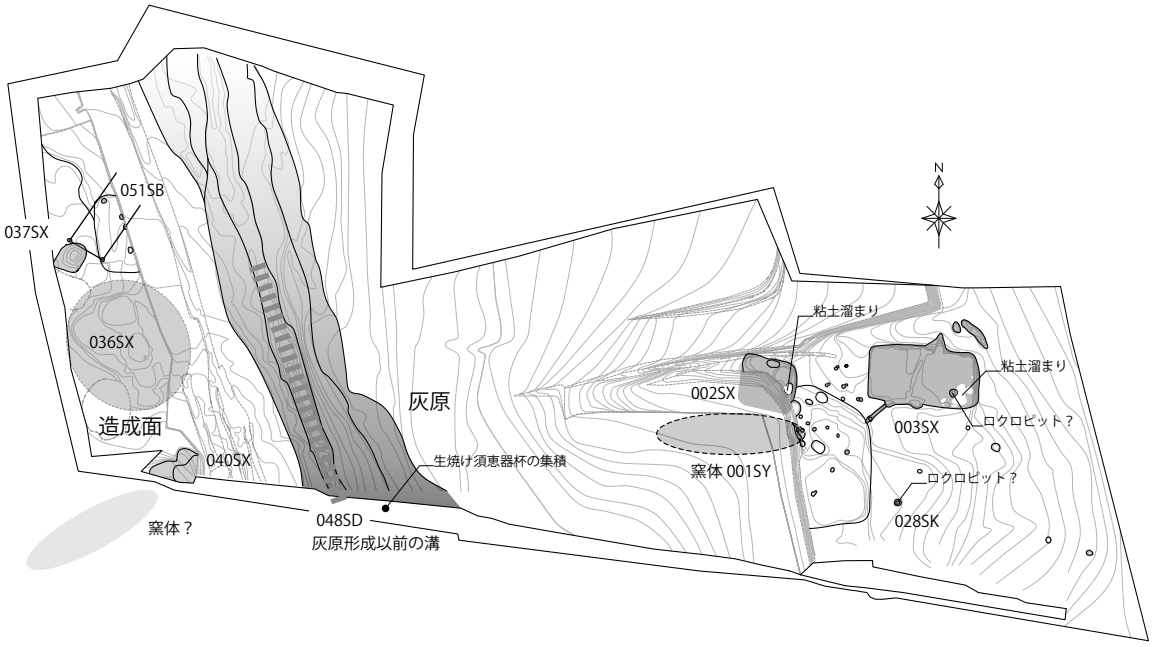
調査地点（1/2.5万「二川東」）

調査の経過　東中田Ａ古窯は、飛鳥・奈良時代の須恵器を焼成した須恵器窯である。本古窯の発掘調査は、一般国道23号豊橋東バイパス建設にかかる事前調査で、国土交通省中部地方整備局名四国道事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。調査期間は平成19年６月～９月、調査面積は1,591㎡である。

立地と環境　東中田Ａ古窯は、梅田川上流域左岸の高位段丘面、天伯原台地が小河川によって開析された小支谷内の最深部に立地する。窯跡付近の標高は60m前後である。付近の小支谷には、中田古窯群、深田古窯群、境川古窯群、東籠田古窯などの須恵器窯が多く分布し、湖西窯跡群（一里山窯跡群）の一角を形成している。

調査の概要　発掘調査の結果、小支谷内の斜面において窯体１基（001SY）、小支谷の緩傾斜面、造成面において作業施設等の窯業生産関連遺構（002SX、003SX、036SX等）、谷底に形成された灰原、灰原下位の溝（048SD等）を確認した。

窯　　体　調査区東部、小支谷内の西向き斜面において窯体001SYを検出した。001SYは窯体の大部分が農地の造成によって失われ、煙道付近がわずかに残存するのみであった。小動物の巣穴による撹乱も著しく、構造等を明確に示すことは難しいが、１回以上の補修があること、煙道の方向が窯体の主軸と大きく異なることを確認した。なお、001SYにおいて遺物は出土しなかった。



主要遺構配置図　（1/ 500）

窯業生産関連遺構　窯業生産関連遺構として、調査区東部の西向き斜面、001SY付近の緩傾斜面において、作業施設と考えられる竪穴状の遺構002SX・003SX、ロクロピットの可能性がある土坑028SK、調査区西部の東向き斜面に造成された平坦面において、不整形の落ち込み036SX・037SX、掘立柱建物051SB等を確認した。

001SY北西に位置する002SXは、一辺約4.0m、深さ約0.4mで、北辺には須恵器甕の破片を芯材に用いた竈が構築されていた。また、西辺付近の床面上に粘土溜まり、粘土溜まりの上面に生焼け須恵器の集積を確認した。001SY北東に位置する003SXは、長軸約7.5m、短軸約4.0m、深さ約0.6mで、北辺中央付近には竈を構築する。竈は煙道部分までが良好に残存していた。床面には、中央付近に短軸方向に対してやや斜行する間仕切り溝が配されるが、主柱穴は確認されなかった。南西隅には、ロクロピットと思われる径約0.5m、深さ約0.4mの断面形が有段状となる土坑Ｐ1が配置され、Ｐ1周囲には粘土溜まりも検出された。001SY南東に位置し、ロクロピットの可能性がある028SKは、下部構造の一部と考えられる粘土塊が残存していた。

036SXは、径約8.0m、深さ0.6mの不整形の落ち込みで、東向き斜面の窯体に付属すると考えられる。埋土中には、窯壁、炭化材、生焼け須恵器、粘土塊が多く含まれることから、製品の選別に関係する遺構とも推測される。037SXは、径2.0m、深さ約0.3mの土坑状の落ち込みで、黒色土が充填されていた。036SX・037SX 付近で検出した051SBは、桁行１間以上、梁間１間の掘立柱建物である。なお、現状において、東向き斜面に窯体は確認されないが、調査区南西付近において、焚口の付近に相当するとも思われる灰と炭化物の広がり（040SX）を確認した。

灰原　小支谷内の谷底に形成された灰原は、東向き斜面に構築された窯体の操業に伴うと考えられる。灰層は、南北方向の谷底に沿って、約５～８ｍの幅で堆積し、調査区南端付近が最も厚い。厚さは最大約0.7mで、最下層にはほとんど灰のみによって形成された灰層も確認された。灰原中には生焼け須恵器杯の集積も検出された。一方、西向き斜面に構築された001SYの灰原は、農地の造成によって完全に失われていた。灰原下位の溝048SDは、灰原形成前に谷底に掘削された幅約1.0m、深さ約0.4mの溝で、操業に先行する段階の窯跡周辺の造成に関係する遺構と推測される。

出土遺物　本古窯の出土遺物は、窯業生産関連遺構と灰原付近から出土した陶器が大部分を占める。これらは湖西窯編年Ⅲ期第３小期を主体とし、７世紀末葉を前後する年代が与えられる。器種は杯、蓋が多く、その他、甕、高杯、鉢、瑞、フラスコ形瓶、横瓶、平瓶、台付長頸壷、ミニチュア横瓶、ミニチュア台付長頸壷、陶錘、陶馬、円面硯等がある。なお、003SXからは鉄鏃、砥石等も出土した。

まとめ　本古窯の発掘調査においては、窯体の残存状況は良好ではなかったが、図らずも窯体とその周辺の作業施設、灰原等を調査することができた。それらの相互の関係が明らかになった点は、大いに特筆される。今後、各遺構についての検討を深めることによって、生産用地の土地開発、製品の製作から流通・廃棄までの過程、生産者の居住形態など、当地域の須恵器生産に関係する多くの知見を提供できるものと思われる。また、灰原等からは、同時期の器種の多くを網羅する資料が得られた。これらは、当地域における生産内容、ひいては、生産領域、生産地間の関係を知る良好な資料として評価される。

（早野浩二）



調査区全景



調査区西部（窯体001SY周辺）



調査区東部（谷底に形成された灰原）



窯体001SY完掘



窯体001SY断面


作業施設002SX遺物


作業施設002SX生焼け須恵器の集積と粘土溜まり


作業施設003SX全景


作業施設003SXロクロピットと粘土溜まり


ロクロピット？ 028SK断面


落ち込み036SX遺物


焚口付近？ 040SX


灰原下位の溝048SD全景

第二東海自動車道横浜名古屋線遺跡範囲確認調査　柿下遺跡・石座神社裏山地区・長篠戦役設楽原決戦場跡儀徳地区・須長10号墳・篠原遺跡・中山砦

所　在　地　新城市富永、大宮字狐塚、大宮字加原、須長、有海、乗本

調 査 理 由　第二東海自動車道横浜名古屋線

調 査 期 間　平成19年５月～６月

調 査 面 積　400㎡

担　当　者　宮腰健司・岡久雅浩

調査の経過　調査は中日本高速道路株式会社豊川工事事務所による第二東海自動車道横浜名古屋線建設に伴う範囲確認調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成19年５月から６月にかけて実施した。調査では、県教育委員会の分布調査の結果を受け、柿下遺跡12ヵ所、石座神社裏山地区88ヵ所、長篠戦役設楽原決戦場跡儀徳地区12ヵ所、須長10号墳10ヵ所、篠原遺跡７ヵ所、中山砦８ヵ所のテストトレンチを設定した。

立地と環境　柿下遺跡は丘陵尾根斜面の平坦地、石座神社裏山地区は丘陵頂部から斜面、長篠戦役設楽原決戦場跡儀徳地区は丘陵尾根裾部の平坦地、須長10号墳は丘陵緩斜面、篠原遺跡は河岸段丘面、中山砦は丘陵尾根の稜線上と裾部の平坦地に立地する。

調査の概要　柿下遺跡では、上位の平坦地を中心に中世～近世陶磁器・土師皿の出土があり、９ヵ所のテストトレンチで溝状遺構・遺物包含層を確認した。また北側の平坦地で山茶碗・土師皿、西側の低地部で山茶碗、上位の平坦地で弥生時代中期の壺片を表採している。

石座神社裏山地区では、丘陵尾根頂部の西側平坦地の広い範囲で多数の古墳時代初頭～前期の壺・甕・高坏の出土があり、竪穴住居・土坑・遺物包含層を確認した。また西側の緩斜面地でも同様の遺物・遺物包含層が見られる。東側の平坦地では遺物・遺構は確認されなかったが、東部緩斜面地の２ヵ所のテストトレンチで須恵器片・土師器片が出土している。

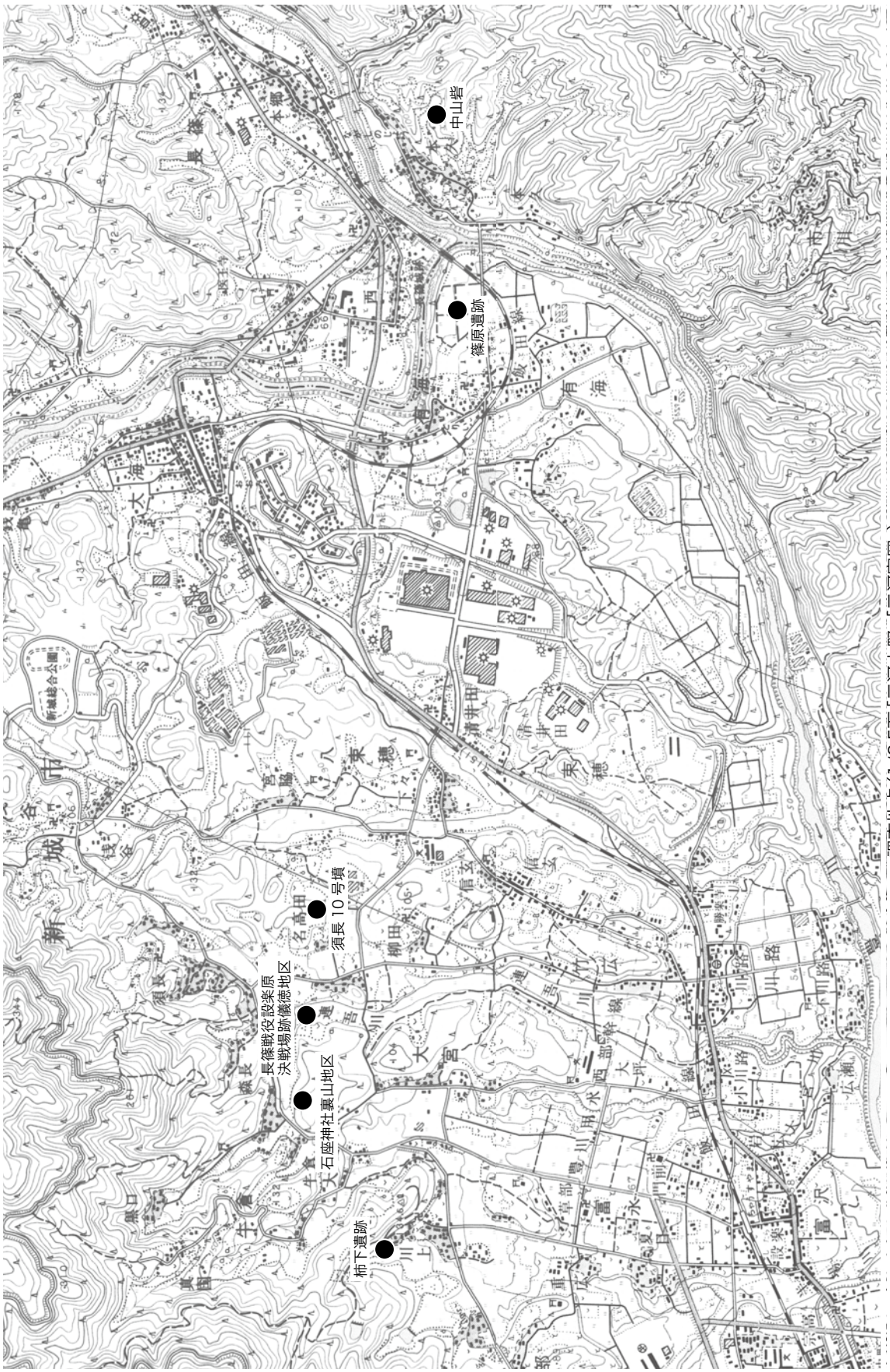
長篠戦役設楽原決戦場跡儀徳地区では、上段の平坦地で時期不明の溝・土坑・ピット列が検出された。さらに遺構検出面より下層の砂層内より須恵器・灰釉陶器・土師質土器が出土している。また東側の下段西部では１ヵ所のテストトレンチより時期不明の土坑状遺構は検出されている。またその下の河川堆積より縄文土器・弥生時代前期土器・須恵器・土師器が出土している。東部では近代と思われる造成の痕跡がみられた。

須長10号墳では、周知の古墳墳丘部裾部に３ヵ所のテストトレンチを設け、周溝と思われる溝・墳丘を確認した。遺物は近世陶磁器片のみが出土している。また周囲の高まりを中心に７ヵ所のテストトレンチを設定したが、遺構・遺物とも確認されなかった。

篠原遺跡では、近代と思われる溝以外に明確な遺構や遺物包含層は確認されなかった。

中山砦では、北側の丘陵裾部平坦地と頂部平坦地に３ヵ所のテストトレンチを設定したが、時期不明の土坑が１基検出されたのみで、明確な遺構・遺物とも確認されなかった。南側の丘陵尾根に沿って設定した５ヵ所のテストトレンチのうち、T.T.06では堀状遺構と土塁状遺構が検出された。遺物は出土していない。その他のテストトレンチでは遺構は確認されず、遺物も出土していない。

（宮腰健司）



調査地点（1/2.5万「三河大野」「三河富岡」）

設楽ダム工事関連遺跡範囲確認調査　滝瀬（たきせ）遺跡・八橋大平（やつはしおおひら）遺跡・大崎（おおさき）遺跡・大名倉（おおなぐら）遺跡

所　在　地　北設楽郡設楽町八橋字タキセ・字大平、田口字大崎、大名倉字下谷・南貝津
調 査 理 由　設楽ダム工事
調 査 期 間　平成19年５月・10月
調 査 面 積　200㎡
担　当　者　宮腰健司・松田訓

調査の経過　調査は国土交通省設楽ダム工事事務所による設楽ダム工事に伴う範囲確認調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成19年５月と10月に実施した。調査では、県教育委員会の分布調査の結果を受け、滝瀬遺跡16ヵ所、八橋大平遺跡19ヵ所、大崎遺跡29ヵ所、大名倉遺跡36ヵ所のテストトレンチを設定した。

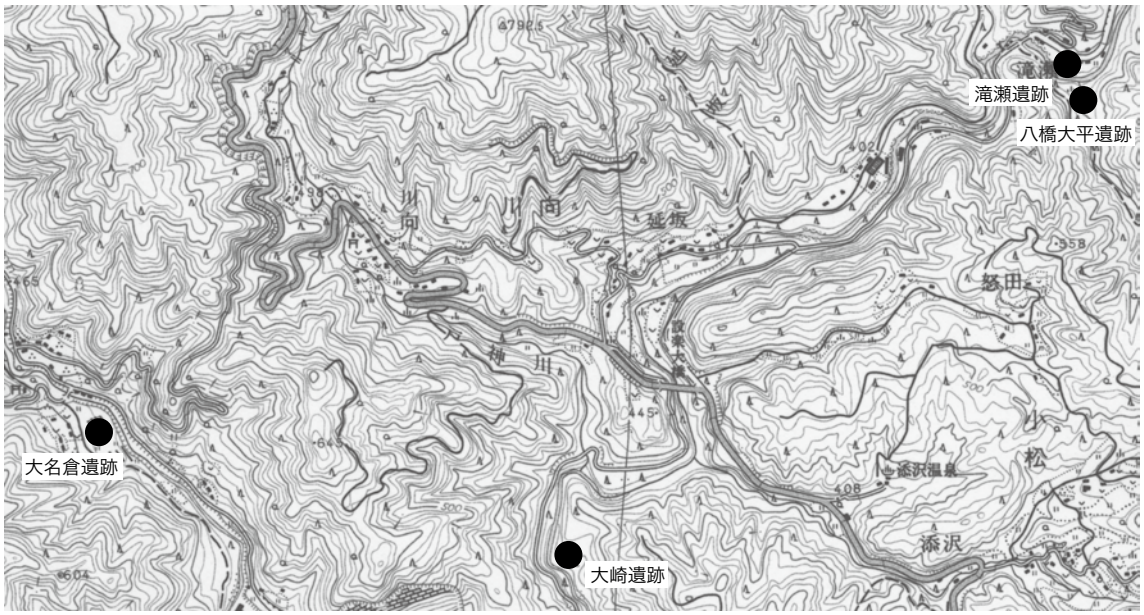
立地と環境　滝瀬遺跡は標高約420mの境川右岸河岸段丘面、八橋大平遺跡は標高約425～445mの長江川右岸の山麓緩斜面、大崎遺跡は標高約363～378mの境川左岸の緩く傾斜する平坦地、大名倉遺跡は標高約428～442mの寒狭川右岸の河岸段丘から山麓緩斜面に立地している。

調査の概要　滝瀬遺跡には、河岸段丘平坦面の南側に16ヵ所のテストトレンチを設けた。その結果８ヵ所で縄文土器・打製石斧が出土し、T.T.08・09で竪穴住居と思われる落ち込み、T.T.10・11で土坑を検出している。

八橋大平遺跡では８ヵ所のテストトレンチで灰釉陶器・近世～近代陶磁器・寛永通宝が出土したが、明確な遺構や遺物包含層は確認されなかった。

大崎遺跡ではT.T.23・24で土坑が検出され、９ヵ所のテストトレンチで縄文土器・石鏃・灰釉陶器・古瀬戸・近世陶磁器が出土している。

大名倉遺跡には、河岸段丘の南側と下位の東側に36ヵ所にテストトレンチを設けた。T.T.26で近世～近代陶磁器が出土したのみで、その他の地点では明確な遺構や遺物包含層は確認されなかった。（宮腰健司）



調査地点（1/2.5万「田口」）